

神秘学ポエジー 風遊戯
mediopos
143

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 291 集】 media-poesieヴァージョン

mediopos 3551-3575

2024.8.9～2024.9.2

神秘学遊戯団

『銀河の片隅で科学夜話』（朝日出版社 2020年）が数年前に話題となった物理学者（高知工科大学理論物理学教授）全卓樹の「社会物理学」に関する連載が『群像』で始まっている

「社会物理学」とは聞きなれないが「40年ほど前に数名の物理学者によって始められ」「ここ10年ほどで物理学会の中でも分野としてやっと認知され始めてきた」という

本連載でとりあげられる話題は「支配＝被支配の動力学」「世論力学」「複数民族の居住パターン」といったものとなるそうだが連載第1回は「支配の力学の入門編」として「支配とピラミッド」

はじめに「人間社会において階級的権力構造が普遍的なのはなぜだろうか。」という問いが提示されている

（デヴィッド・グレーバーの『万物の黎明』などを読めば必ずしも階級的権力構造が普遍的であるとは限らないといえそうだがここではそれは問わないことにする）

全卓樹は「意外にも答えは数学の「微分方程式論」の中にある。「力学系理論における固定点の性質」である」という

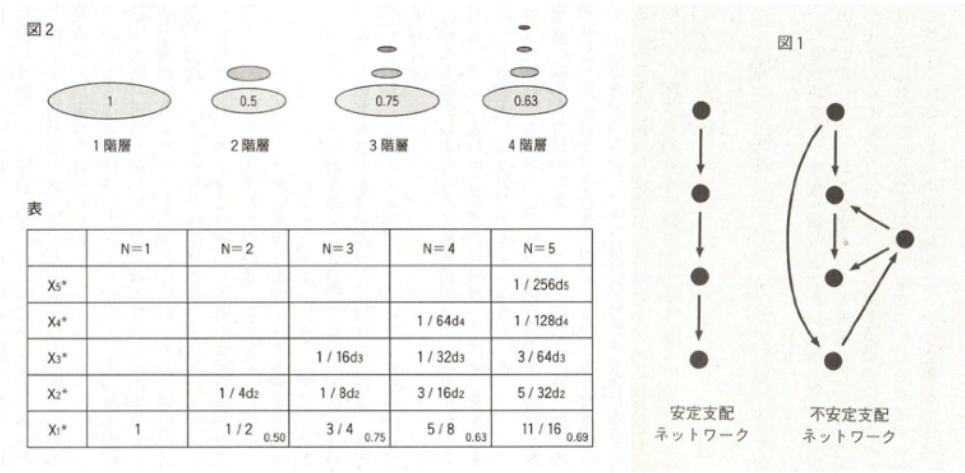
「草を食んで生きる野牛と、野牛を狩って生きるライオンがいるサバンナ」においては「野牛とライオン各々の人口推移は、ある数学的法則に従って定まっている」

野牛とライオンの人口の変化率を方程式で表現したものが「ロトカ＝ヴォルテラ微分方程式」で「この方程式を解くと、どんな人口から出発しても、野牛人口、ライオン人口共に増減を繰り返しながら、しまいに安定なそれぞれの値に落ちつくことになる」

この議論は人間社会における「一次生産者と収奪者からなる系」などにも適用可能で「最適行動をとる捕食者がいることによって、捕食者のない場合に比べて、被食者は半分まで人口を減らす」という結論が得られる」

全卓樹は少しばかり意味深い示唆をここで加え

江戸時代において武士の取り分が農民の生産物の半分であった「五公五民」や現代の日本においても「国民負担率がほぼ5割」なもの「決して偶然ではないだろう」としている（現代日本の国民負担率は6割を超えているともいうが…）



さてこの記事でテーマとされているのは「支配の力学」だが全卓樹は2003年の研究において「一元的な支配連鎖の人口構造について、ロトカ＝ヴォルテラ方程式から得られる知見」を得ている

支配関係のない1層構造
被支配者と収奪者がいる2層構造
収奪者に一次と二次の二つがいる3層構造
三次収奪者までいる4層の構造
では

「支配者の階層が増えるにつれて、被支配者の人口が減る、増える、減るという、奇妙な偶奇性を持つ変化をしていることが見てとれる」

「多くの国にあっては「一般庶民」、富と権力を持つ「支配階級」の二つに加えて、社会の管理運営の実務を取り仕切るテクノクラートの「中流階級」がはっきりと存在する」3層構造が多く見出せるのは「一次生産者が、収奪によって感じるであろう不満足感が少な」く「長期的に安定」しやすいからだろう

さて重要なのはここからであるフランスの社会学的歴史学者エマニュエル・トッドは「近著『西洋の敗北』において、20世紀に西部欧州を中心に繁栄した自由民主制が徐々に変質し、21世紀に入って自由寡頭制に移行し、その結果社会の不安定化が起きている」と論じているが

自由寡頭制（オリガルキー）を特徴づけるのが「財政セクターと情報技術セクターの成功者たち、そして軍需産業関係者で形成するオリガルキーの圧倒的優位性」であり今や「3層構造から実質的な2階層構造への社会の転換」がなされようとしている

そんななか民衆は「財政技術軍需オリガルキーの横暴を抑える民衆の王の誕生」を求めようとする

現代社会の病理はまさにそこにあるようだどちらを選ぼうがそれぞれはそれぞれの病理を抱えざるをえない



■全卓樹「わたしたちの数理 第1回 支配とピラミッド」（新連載）（『群像』2024年9月号）

「古来から人間と深い結びつきをもつ「鳥」。
その神話性、生物学的意義、群体のメカニズム、
市井の生活者との関わりなどから、
まるで並行世界のように広がる鳥の世界を仰ぎ見る特集」

今回は山下正太郎編集長による巻頭言「さえずり機械」より

「さえずり機械」といえば
パウル・クレーの作品（1922年）

クレーは「生涯にわたって鳥に魅了されたひとり」であり
「彼にとって鳥は、自由、精神性、創造性の象徴として
作品に頻繁に登場する存在であった」

そして「クレーの作品における鳥は、
単なるモチーフ以上のポジティブな意味をもち、
彼の内面世界や精神的探求を反映する重要な対象となっている」

『黄色い鳥のいる風景』のように
「鮮やかな黄色い鳥を強調することで、
希望や幸福、活力を象徴している」 こともあれば

『天使というよりむしろ鳥』のように
「見えない世界へといざなうメタファーとして
鳥を無垢な天使に見立てている」 こともあるが

『さえずり機械』には
「未来への希望と恐怖を象徴する」テクノロジーの影響が見られる

この作品が描かれた1922年という時代背景には
当時ドイツがおかれていた社会状況
「革命による帝政の崩壊、ハイパーインフレ、
労働者のストライキ、そしてヴェルサイユ条約による
莫大な戦争賠償金など、政治的・経済的な混乱」があり
さらに「1919年にドイツ労働者党として結成された
ナチスの台頭」があった

それは当時の「絶望と混乱からの反動」でもあり
「同時に浮上してきた希望の光」である
「テクノロジー」があった

「1919年に設立されたバウハウス」もまた
「その創設からしてテクノロジーと密接に結びついていた」が
クレーは「カンディンスキーに誘われるかたちで、
1921年にバウハウスの教授として招聘され」ている

『さえずり機械』が制作されたのはその直後のことだが
クレーの態度は同時代の芸術家たちの
テクノロジーに対する意識とはずいぶん異なっていた

たとえば「バウハウスに先行して、
テクノロジーの美学を探究したイタリアの未来派」は
自然を「無音で構成され、退屈なもの」ととらえていた

『さえずり機械』は「バウハウスの理想と
クレーの内なる葛藤がないまぜに」なった作品であり
「テクノロジーに対する希望と不安が交錯する時代にあって、
クレーは機械の冷たさと人間の感情の温かさ、
そのふたつの相反する要素を描き出そうと」している

「奏でられる時代の不協和音を、
クランクでつながれた針金の鳥たちが
奏でる五線譜として描くことで、
テクノロジーに隷属させられ、自律性を失いながらも
抗おうとする自然や人類がその存在を訴えてくる」

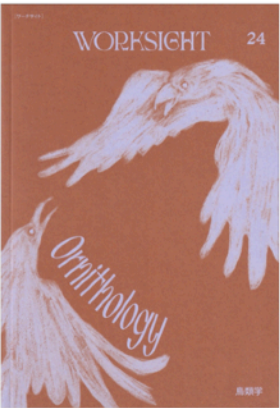
「自らの意志でもなく、さりとて他律でもない、
さながら小鳥のさえずりに
何かのメッセージを読み解くかのように、
時代のうごめきを画面に収めた」ともいえるだろうか

山下編集長はこの「さえずり機械」を
「ソーシャルメディアという絶え間ないさえずり」に重ねている

「クレーの作品名そのままのタイトルを冠した政治学者
リチャード・シーモアが書いた『The Twittering Machine』」は
「現代のデジタル社会がどれほどディストピア的な状況に
陥っているかを鋭く描き出している」

「クレーもまた、テクノロジーに駆動された戦争を賛美する
未来派がファシズムに取り込まれていったことを、
きっと横目に見ていた」であろうように

現状においてはマスメディアやソーシャルメディアだけではなく
A I的なテクノロジーふくめ
それらに対して無自覚なとき
それらがいかにディストピア的な状況を招くかが
如実であるにもかかわらず
テクノロジーに使われ「さえずり」続ける人は後を絶たない



■山下正太郎 巻頭言「さえずり機械」
（『WORKSIGHT [ワークサイト] 24号 鳥類学 Ornithology』
WORKSIGHT編集部（ヨコク研究所＋黒鳥社） 2024/8）

すでに「さえずる」のはなく機械がさえずっているのを
麻薬のように享受しその背後にあるものの姿を
とらえられなくなっているともいえる

クレーが現在に生きていたら
スマホのような機械のなかに棲んで
呆けた顔をしている天使など描きもしただろうか

「先祖の魂が還ってくる盆の中日、幼い少年と少女の前に、78年前に死んだ日本兵の亡霊が現れる――。時空を超えて紡がれる圧巻の「語り」」…

『月ぬ走いや、馬ぬ走い』で群像新人文学賞を受賞した豊永浩平が『群像』2024年9月号の「文一の本棚」で藤枝静男の『田紳有楽・空気頭』をとりあげている

二十一歳の豊永浩平は
そこになにを読みとろうとしたのだろうか

柄谷行人は『夢の世界――島尾敏雄と庄野潤三』において「カフカの小説に夢の雰囲気を与えているのは、事物の詳細な描写と明瞭な現前性である。カフカは夢を書いたのではない。ただ、「距離」を奪いとられた現実を書いたのである」と示唆しているというが

豊永浩平はそこから
「藤枝静男という作家の「距離」を考えてみたい」という

藤枝静男はいわゆる「私小説作家」であるが

「おなじく夢的な私小説を記した「第三の新人」は、みずからの身边をキメ細やかに綴り、景色と眼の「距離」を揺るがせることで、たゆたう人間の精神的源泉ともいような地点を捉える」

「ところが藤枝は、この「距離」を型破りに一ツ飛びしてしま」うのである

藤枝静男は「現実への「距離」を取り払った嘘偽りない「私」の小説」を書く

「老境が迫った藤枝が記した小説集『虚懐』ではこう表現されている

「自分自身の外との関係は何とかゴマ化し、或いは忘れ、或いは捨て去ることができるという気がする。」
「しかしただ、自分から生み出されてくる悲劇はいくら努力しても処理できない。
依然として苦しいばかりだ。」というのである

「外は子細に対象化できても、内にある悲劇からは逃れられない。
なぜなら、自らの内部と「距離」をとることは、誰にとっても困難であるから。」

そこに藤枝静男の小説『田紳有楽』が生まれる



- 連載書評 文一の本棚
豊永浩平「藤枝静男『田紳有楽・空気頭』」
（『群像』2024年9月号）
- 藤枝静男『田紳有楽』（講談社文庫 昭和53年11月）
- 豊永浩平『月ぬ走いや、馬ぬ走い』（講談社 2024/7）

「逃れえぬ「私」と、外の精細な自然との闘が互いに侵され合い、浄土と呼ぶべき地平があらわれ」「カンカンカン、というあの鉦の響きと、田紳有楽、という眞物たちの輪唱」の世界…

かつて藤枝静男『田紳有楽』を表したドイツ文学者で批評家の川村二郎はこう評している

「幻想的表現は通例、現実からの逃避と見なされる」が「幻想と現実とを単純に二元論に対比することは、そのどちらに対しても、不当な過小評価に陥る危険がある」

「それならば「私」もまた当然、両面に相わたる形で探られなくてはならない。」

「現実と幻想の単純な二元論を撤廃して眺め」る試みこそ「表面からだけでは確認できない「私」を、裏面から、あるいはその存在の無意識の根底から、うかがい取ろうとする果敢な企てということになる」

カフカの小説は私小説ではないが
単に「夢」を描いたのではない
「事物の詳細な描写と明瞭な現前性」を有している

ただそこには外的現実と内的現実
現実と幻想などが有している常識的な「距離」が奪いとられた現実が書かれているのである

mediopos3549(2024.8.7)でとりあげた
『談 no.130 トライコトミー』から
ひとつめのインタビュー
清水高志「二項対立を調停する」について

このインタビューでふれられている
「トライコトミーTrichotomy（三分法）、禅、アニミズム）」
『空海論／仏教論』については
それぞれmediopos2591（2021.12.20）及び
mediopos3198（2023.8.20）でとりあげた内容と重なるが
それをふまえながら重要ポイントだと思われるところを
いくつかピックアップしておくことにする

西洋の論理の基本は
古代ギリシャ以来矛盾律（「Aは非Aではない」）であるが

インドでは古くから西洋的な二者択一に対し
「Aである」「非A」であるという命題に加え
「Aであり、かつ非Aである」
「Aでもなく、かつ非Aでもない」という
二つの命題が加えられたテトラレンマが説かれてきた

それをふまえながら清水高志は
「主体／対象」「一／多」という二つの二項対立に加え
「内／外」という二項対立を加え組みあわせ
「トライコトミー」という思考法を提案している

なぜ「三（トライ）」という三分法なのか

「二項対立が複雑に絡み合い、組み合わせを替えていくことで、
どこにも偏らない構造をつくれるのではないか」ということから
「「対象と主体」「一対多」の二つの二項対立に、
第三の二項対立として「内と外」を加えることで、
二項対立に新たな調停の仕方を生むことができるのではないか」

「これが「三（トライ）」になった最初の理由」だったそうだが
こうした「複数の二項対立を組み合わせる
「対象」を二元論から解放していくという考え方は、
そもそも「構造主義」が提示したもの」で
その一番完全なモデルがレヴィ＝ストロースの
「クラインの四元群のモデル」（図1）である

最小限で二種類の二項対立による「偏らない大系の構築」によって
「始まるポイントもなければ、終わるポイントもない」。
この「どこでもないという関係」こそが第四レンマ、
すなわち「Aでも非Aでもない」ことじゃないか」
そう清水高志はとらえている

つまり「ものごとを考える時に、
何らかの出発点があったそこからボトムアップで考える方法は、
最初の出発点が間違っているとすべてが間違っていってしまう」

レヴィ＝ストロースが抽出した「構造」とは
「諸要素から要素間の関係が確定的に導きだされるのでもなく、
要素間の関係から確定的に諸要素が導きだされるのでもない」。
そういった「どちらでもない」状態のなかで生まれる
さまざまなヴァリエーション」であり
そうすることでボトムアップで考える陥穽としての
「ドクサ（思い込み）」から自由であることができる

こうした多様性に関かれた構造の考え方を
清水高志はインド哲学や仏教の教えに見出し
ナーガールジュナの『中論』や
『唯識』『華嚴』『密教』といったものから
さまざまな啓発を受けそのヴィジョンを転回させている

多様性に関かれた構造の考え方はたとえば
唯識派の教典『瑜伽師地論』や道元の「現状公案」にもでてくる
「一水四見（いっすいしけん）」という言葉にもあらわれている

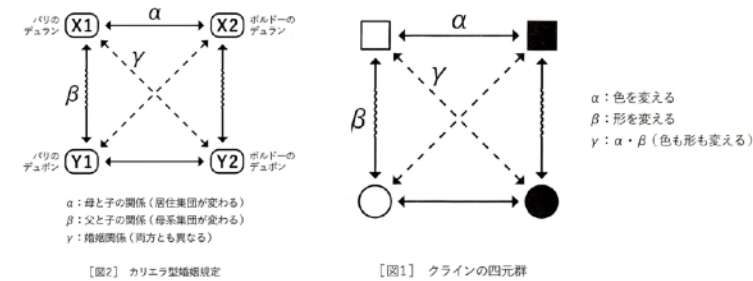
「人間は水を水と見るけれども、天人はそれを瑠璃と見、
餓鬼は膿の血と見、魚は自分の宮殿と見る」

「めいめいが異世界に生きており、しかもそれらの世界が
最終的にユニファイ（統一）されることもないし、
ある世界がそれらすべての世界を包摂することもない。
それらは相互に包摂し合っていて、そのままである。」
というのである

このインタビューのタイトルでもある
「二項対立を調停する」ということのためには
二項対立を否定するという短絡的な方法は意味をなさない



- 清水高志「二項対立を調停する」
（『談 no.130 トライコトミー ...二項対立を超えて』水曜社 2024/8）
- 奥野克巳・清水高志『今日のアニミズム』（以文社 2021/12）
- 清水高志『空海論／仏教論』（以文社 2023）



〔図2〕 カリエラ型婚姻規定

〔図1〕 クラインの四元群

細野晴臣と中沢新一の対談
「精神の音楽を追い求めて」が
『新潮』2024年9月号に掲載されている
(2月14日、細野氏のスタジオで収録され
「波」2024年4月号に掲載されたもののロングバージョン)

話は主に
細野晴臣と中沢新一の出会い
YMOの音楽と三人の音楽性
昭和歌謡について
そして『精神の考古学』を書いた理由
といった内容で

細野晴臣の音楽と中沢新一の著作
そして二人の旅の記録『観光』など
ほぼ同時代的に享受してきた者としては
それらをつなぐエピソードの数々を楽しむばかりだが

そのなかからメモしておきたいところを
いくつかピックアップしてとりあげてみる

中沢新一はチベットから帰国して間もないころ
YMO「散開コンサート」(1983)で
編集者の後藤繁雄に連れられ細野晴臣と会う

中沢新一はチベットでの修行中
はじめてYMOの音楽を聴きそのなかでも
アルバム『BGM』(1981)が好きだったことから
最初の著作『チベットのモーツァルト』(1983)の装幀を
『BGM』のジャケットデザインを手がけた奥村靱正に依頼
あのカバーにある「オカメみたいな顔の絵」はそのときのもの

中沢新一と細野晴臣を結びつけたひとつは
精神世界への関心

当時「YMOと「ニューアカ」の繋がり」でいえば
片方には坂本龍一と浅田彰という左翼革命派がいて
細野晴臣と中沢新一はそれに対するというかたちで
メディアに仕立て上げられることになる

細野晴臣曰く「僕が精神世界に関する本を読んでいたら
「そんなの読んじゃダメだ」とよく注意された」とのこと

その後中沢新一は坂本龍一と
『縄文聖地巡礼』(2010)の旅を始めたりもするが

中沢氏によると坂本龍一は
「内面はとても素朴でナイーブ」で
「表向きこそ理論武装したいけど、
本当は彼も昔からチベットやアフリカに関心があった人」で
「内側では不思議なもの、不合理なものが渦を巻いているのに、
そうしたものに触手を伸ばそうとするのを
外側の口ゴスの鎧が防いでいるという印象があ」ったそうだ

坂本龍一は坂本龍一なりに
無意識からの働きかけのようなものを受けながら
揺れていたようだ

「『縄文聖地巡礼』のときに坂本さんの内面の変化が見えて、
これからこの線を延ばしていくのかなあと予想していたら、
予想に反してその後は僕からすると
また西欧音楽に戻っていったように見え」たという
それが坂本龍一の個性でもあり限界でもあったのだろう

さてYMOの三人についてだが
中沢新一はこのように形容している

「YMOの三人は昭和歌謡の受け継ぎ方が
それぞれに違うんですね。
細野さんは昭和歌謡がかなりストレートに入っていて、
幸宏さんはもうちょっとソフィスティケートされている」

「坂本さんはやっぱり西洋音楽がベースにあって、
でも小泉文夫さんを通して知った、
プリミティヴィズムに向かう
モダニズムというもう一つの顔が覗いている。
タイプの違う三人が合体したから、
YMOがすごいものになった」と

昭和歌謡についての対話は特に興味深いし
ともすれば等閑にされがちなところかもしれない

「文藝春秋」本誌で昭和歌謡ベスト3のアンケートがあり
それに細野晴臣も中沢新一も回答したとのことだが
その記事を見て
「みんな本当の昭和歌謡を挙げていない」と
ショックを受けたという

昭和歌謡というものを「構造」として捉えてるのは
細野晴臣も中沢新一のほかには玉三郎のみ
(さすが「玉三郎」という感を強くする)

「昭和歌謡のベースになっているもののひとつは「追分」」で
「高音で歌う民謡がベース」にあり
「それを新しく発展させたのが三橋美智也や三波春夫」
「いまはその最終形態として細川たかしあたりがいる」
「演歌は朝鮮半島から入ってきた音楽だけど」
「日本人にはそれとは違う演歌が存在し」
「その代表格が八代亜紀」(中沢新一)



- 細野晴臣・中沢新一
対談「精神の音楽を追い求めて」
(『新潮』2024年9月号)
- 中沢新一『チベットのモーツァルト』(せりか書房 1983/11)
- 細野晴臣・中沢新一『観光』(角川書店 1985/6)
- 中沢新一『精神の考古学』(新潮社 2024/2)

ちなみに中沢新一の上げたベスト3は
細川たかしの「望郷じょんから」
八代亜紀の「カスバの女」
藤圭子の「北の蛍」

細野晴臣は
島倉千代子「からたち日記」
花村菊江の「潮来花嫁さん」
春日八郎の「山の吊橋」
を挙げている
中沢新一曰く「昭和歌謡の責任を負っているような」
そんなところからベストを選んだようだ

「自分が生まれる前の時代の音楽の豊かさは、
掘っても掘っても掘りきれない宝の山」(細野晴臣)で
「一人の人間が体験した、たかだか十数年の間の
音楽なんかを持ち上げて語っちゃいけない、と思います。」
という

さて最後に
中沢新一が『精神の考古学』を書いた理由について

オウム事件の影響等もありこれまで書かなかったのを
「三年くらい前にちょっと体調を崩したとき」
「チベット人たちが僕に伝えたものが」
永遠に失われてしまわないようにと書き記した

とはいえあくまでも
宗教としてそれを伝えるのではなく
「低成長の時代に生きていくこれからの人のために、
ものを考えるためのベースを提示しておかなくちゃいけない」
そういう思いもあったという

mediopos3549(2024.8.7)でとりあげた
『談 no.130 トライコトミー』から
ふたつめのインタビュー
奥野克巳「縁起あるいはアニミズムの他力性」について

奥野克巳はマルチスピーシーズ人類学の研究者で
『談』no.118でもそのインタビューを
mediopos-2154（2020.10.9）でとりあげたことがある

奥野克巳の「マルチスピーシーズ人類学」についてはこれまで
『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして
人類学者が考えたこと』（亜紀書房 2018.6）や
人類学を軸とした思想誌『たぐい』（vol.1-4 2019/3-2021/10）をはじめ
『絡まり合う生命ー人間を超えた人類学』（亜紀書房 2021/12）
奥野 克巳『人類学者K』（亜紀書房 2022/12）
奥野克巳『はじめての人類学』（講談社現代新書 2023/8）について
medioposでも随時とりあげてきているが

今回のインタビューでは
アニミズムおよび仏教の縁起の思想及び
その他力性について語られている

マルチスピーシーズ民族誌は「従来の人間中心の世界観から脱して、
あらゆる生物種（マルチスピーシーズ）は
人間にとって単なる対象ではなく、それらすべての絡まり合いとして
この世界はできていると捉える考え方」であり
「「自然」と「人間」というような従来の二項対立的な考え方を
更新していく、新しいパースペクティブ」として展開されている

『今日のアニミズム』の第一章
「アニミズム、無限の往還、崩れる壁」で示唆されているように
中沢新一の「カイエ・ソヴァージュ」の論旨に依拠しながら
奥野克巳は「メビウスの帯」を使ってアニミズムを説明している

「メビウスの帯の「裏表なく延々と続く」構造は、
浄土教の教えのなかの「還相」、
つまり一度死んで極楽に往生した者が、再び現世に還ってきて、
一切の衆生を仏道に導くというように、
生死の境を「往還」するような「動き」に相応」し
「そのダイナミックな「動き」のなかに、
アニミズム的な経験がある」という捉え方であり

さらに「メビウスの帯が裏でも表でもあるように、
アニミズムを構成するのもさまざまな要素からなる
「アマルガム」であり、それは因果的な生起の関係ではなく、
同時的、共時的に存在しているという捉え方」である

さてアニミズムについては
一九世紀においてイギリスの人類学者エドワード・タイラーが
一八七一年の著書『原始文化』で提唱した
「あらゆるもののなかには魂、あるいは精霊が潜んでいる」
という定義があったが
アニミズムは長く人類学の研究対象から外されていた

タイラーのいう精霊信仰は
「たとえば樹木は物質」に「人間の精神を投影して、
霊性や、ある種の人格を感じ取る」ような
「精神」と「物質」や「人間」と「非人間」といった
二項対立的な図式が背景にあったのに対し
デスコラやヴィヴェイロス・デ・カストロたちは
その二項対立を超えるアニミズム理解への検討を始める

そこで重要なのが「メビウスの帯に象徴されるような
「動き」であり「シンクロニシティ」」である

そうしたアニミズムへのアプローチは
「これまで極めて人間本位にこの世界をつくりあげてきた
という歴史」からの反省でもあったが

「人間はたくさんある種のなかの一つの種である（に過ぎない）
という視点から、人間中心ではないあり方を探ろう」とするのが
マルチスピーシーズ人類学であり
新たなヴィジョンのもとでのアニミズムであるといえる

さて「同時性」あるいは「シンクロニシティ（共時性）」という
アニミズムの視点に関し
奥野克巳は上記の「アニミズム、無限の往還、崩れる壁」に
岩田慶治の独自のアニミズム論から
「アニミズムは禅に近く、シャーマニズムは浄土教に近い」
という言葉を引用している

奥野克巳によれば
「岩田さんが「シャーマニズムは浄土教に近い」と言うのは、
つまり浄土教に言う「還相」をイメージされてい」て
「岩田さんがアニミズムは禅に近いとおっしゃっているのは、
アニミズムは禅と浄土教の両方をはらんでいる」
そして「その上にシャーマニズムがあると考え」ているのだという

中沢新一は『レンマ学』において
「因果律で結びついている表層的な現実の下に、
このような偶然の集積がレンマ的結合によって相互関連しあう、
別の存在領域が活動が続けている」と捉え、
それこそがアニミズム的な世界だと」示唆しているが
それは岩田慶治のいう「同時」ということでもある



- 奥野克巳「縁起あるいはアニミズムの他力性」
（『談 no.130 トライコトミー ...二項対立を超えて』水曜社 2024/8）
- 奥野克巳・清水高志『今日のアニミズム』（以文社 2021/12）
- 奥野克巳『絡まり合う生命ー人間を超えた人類学』（亜紀書房 2021/12）
- 岩田慶治『アニミズム時代』（宝蔵館文庫 2020/9）
- 中沢新一『神の発明（カイエ・ソヴァージュⅣ）』（講談社選書メチエ 2003/6）
- 中沢新一『レンマ学』（講談社 2019/8）
- ティム・インゴルド（奥野克巳・宮崎幸子訳）『人類学とは何か』（亜紀書房 2020/3）

そうしたことをふまえながら奥野克巳は
「主体的な「自力」だけではなく、別の力が働いていて、
自分自身にとっては「他力」もあるということに
想像力を働かせることがアニミズムのなかにある
「他力」を考える出発点になるのではない」かと示唆を加えている

「人間の「自力」がすべての世界をつくり
コントロールすると考えるのではなく、
そうじゃない何か別の力が働くことでこの世界は成り立っていて、
われわれはその力、すなわち「他力」のなかで生かされている
ちっぽけな存在である」
「そういう視点も必要なのではない」かといい
そしてそれこそがアニミズムの本質ではないかというのである

mediopos3549(2024.8.7)でとりあげた

『談 no.130 トライコトミー』から

三つめのインタビュー

護山真也「〈今ここ〉の極地点、未来原因説と仏教哲学」について

インド仏教のプラジュニャーカラグプタの「未来原因説」

つまり過去と未来は対称性の関係にあり

過去が結果を生み出すならば

未来もまた結果を生み出す作用を持つというように

現在では未来からの影響のもとに成立している

という視点を検討することを通じ

仏教の教えの核でもある「縁起」を生きること

「過去・未来・現在」という時間の枠組みや「時間の矢」

そして「原因」と「結果」の常識から自由になって

ものを考える視点が示唆されている

さてプラジュニャーカラグプタの「未来原因説」だが

その説明のためにまず「縁起」について語られている

「縁起」とは「原因」によって「結果」が生じる

「因果関係」と理解することができるが

「この世界のあらゆる出来事にはしかるべき原因があり、

その原因が取り除かれれば、その出来事は生じない」といえる

そこで問題とされたのが

「これがあればかれがある」という「因果関係」は

「時間的な関係」

つまり「原因」というものが時間的に先行し、

「結果」であるものが時間的に後にある」のか

「因果関係のなかに時間的な関係を読み込む必要はなく、

「原因が結果に先立つ」という考えを

根底から問い直すことができるのかということである

「Aが原因で、Bが「結果」とすれば、

推論の基本式は「結果があれば原因がある」となり」

「「結果」を観察することから「原因」を導くのであり、

「結果」から「原因」を推理する」ことはできるが



■護山真也「〈今ここ〉の極地点、未来原因説と仏教哲学」

（『談 no.130 トライコトミー ...二項対立を超えて』水曜社 2024/8）

■護山真也「仏教認識論の射程——未来原因説と逆向き因果」

（『未来哲学 創刊号（二〇二〇年後期）』未来哲学研究所 ぷねうま舎 2020/11）

■護山真也『仏教哲学序説』（未来哲学研究所 ぷねうま舎 2021/3）

ダルマキールティは「原因」と「結果」との間に

わずかでも時間的な幅があるとしたら、

その間にそれを疎外する要因が生じる可能性がある」がゆえに

「原因から結果を推理する」ことはできないとしている

そのようにダルマキールティは

「結果から原因は推理できるが、原因から結果は推理できない」

という仏教論理学の基本テーゼを立てる

このことは「過去→現在→未来」という「時間の矢」や

「原因」から「結果」が生じるという日常的な常識とは逆だが

私たちの堅固なまでの日常的なリアリティの世界は

あくまでも「言葉や概念による分節化をとおして、

その投影をとおして見ている」世界であって

「そういった馴染みの概念の関係を解体し、

そこから自由に」なるために

こうした仏教的な「縁起」に基づいた価値観から

新たなリアリティを創造していくことも可能ではないかという

もともと仏教は

「何かを「業」と考え何かを「果報」と考え、

何かを「原因」と考え何かを「結果」と考えるという、

そのこと自体を一つの執着として、それすらも超え」

「完全なる自由な状態に到達すること」を目的としている

護山真也はインタビューの最後に

仏教を哲学することを通じて

「縁起」というものの見方を取る（「縁起を生きる」）ことにより

「時間」をはじめとした常識から自由になって（「時間を遊ぶ」）

ものを考えられるようになる可能性を示唆している

NODA・MAP第27回公演『正三角関係』
（野田秀樹作・演出）の公演が続いているが
そんななか『新潮』2024年9月号に
作品台本が掲載されている

実際に観劇してはいないものの
WEBで視聴できる冒頭のシーンやSPOT映像を繰り返し見ながら
作品台本を読みながら実際の舞台を想像してみているが
久々読むことになった野田秀樹ならではの作品表現に感動を覚えている

物語の入口・舞台は
父殺しを描いたドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の
第四部第十二編「誤審」の裁判劇であり
それが「日本のとある場所のとある時代の花火師の家族」である
「唐松族の兄弟」の新しい物語に置き換えられ

そこにキリシタン弾圧の行われた歴史をもつ長崎への原爆投下
ロシアとの関係
（『パンドラの鐘』では同じく長崎が舞台で
アメリカとの関係がクローズアップされていた）

唐松族（カラマーゾフ）の兄弟とその配役は
唐松富太郎（松本潤）
威蕃（永山瑛太）
在良（長澤まさみ／グルーシェニカと二役）
父親の兵頭（竹中直人／盟神探湯検事と二役）
不知火弁護士（野田秀樹／良神父とクライアントの三役）

作品掲載誌とは異なった『文藝界』に掲載されている
長谷部浩 劇評「天の星は地に落ちた
————野田秀樹作・演出『正三角関係』をめぐって」が
わかりやすい解説にもなっている（以下の引用部分参照）

舞台の前半において三人兄弟のうち威蕃は物理学者の卵であり
アメリカによる原爆投下を扱った劇であることが示されている

しかも視覚的に「数式や模型の球が示された直後に」
「ヨハネの黙示録」第六章十四節からの引用がなされ
「天は巻物が巻かれるように消えていき、
すべての山と島とはどこかへ吹っ飛んだ」という
物語の最後に原爆投下がなされるシーンにつながっている

タイトルの「正三角関係」には
三人の兄弟
グルーシェニカをめぐる父と富太郎
富太郎をめぐる二人の女性
法廷劇としての法曹三者
日本・アメリカ・ロシア
花火師の話なので空にあがる花火・・・
といったさまざまな「関係」が込められていそうだが
それらすべてを絡み合わせながら
長崎出身である野田秀樹の背景にあるものが
絶妙なかたちで表現されているのだろう

ちなみに野田秀樹はノダマップ設立以降
原爆を背景とした『パンドラの鐘』
『オイル』『MIWA』
そして本作を発表してきている

劇評のなかで長谷部浩は次のように示唆している
「人類の歴史のなかで、不当な弾圧や
避けがたい災禍に襲われたとき、
人々は、神の存在を疑ってきた。
『正三角関係』に神学論争はないが、
神に向かって素朴な問いを投げかける姿勢で
一貫している。」

物語の最後に富太郎以外の人たちは
原爆投下で死に絶えるが
原爆が投下されるまえの在良の台詞が深く刺さってくる

「一粒の麦、地に落ちて死ななければ、
それはただ一粒のままである。
けれど、一粒の麦が、地に落ちて死んだなら、
たくさんの実りをこの大地に生み出すだろう。」

長谷部浩は最後に
「物語の結節点にたびたび登場」し
「召集令状をかつて届け、
今は戦死を知らせる役割を負っている」
郵便配達員の少年について記している

「私たちは少年に、未来への希望を仮託することもできない。
崩壊しつつある世界に対する絶望感を隠せない。
砂を噛んだような無念さが私を襲った。」

物語は決して未来を楽観させるものではなく
ある種の「絶望」にひとを置き去りにするところもあるが
おそらくひとはそこからしか
新たに歩き始めることはできないということなのだろう

遠藤周作の『沈黙』がそうであったように
神は「沈黙」でしかこたえることはないのだから

野田秀樹はおそらく
いまだ私たちにとってこたえをもたらないままの
「昭和」という時代への問いを繰り返し続けているようだ

それは劇で使われる昭和の音楽に
象徴されていたりもするようだ
ちなみに本作ではまるでテーマ曲のように
ザ・カーナビーツ『好きさ好きさ好きさ』や
ザ・モップス『たどりついたらいつも雨ふり』が
繰り返し使われている（若者たちは知っているだろうか）



- 野田秀樹「正三角関係」（『新潮』2024年9月号）
- 長谷部浩 劇評「天の星は地に落ちた
————野田秀樹作・演出『正三角関係』をめぐって」
（『文藝界』2024年9月号）

辻田真佐憲「煽情の考古学」（『文學界』で連載）が最終回を迎えている（第32回）
タイトルは「新しい情報戦の時代に」

記事は「われわれはいま、新しい情報戦の時代に生きている。」という言葉ではじまっている。

少しでも意識的に世の中を見ている者にとってこの言葉は深く肯ける実感だろう

しかしいまだ新聞やマス・メディアからの情報はいうまでもなくインターネットにおいてもそれらの多くがとくに政治的なものに関し「プロパガンダ」や「言論統制」に満ちたものであることに意識的であるひとたちが増えているようには見えない（いまだ街には「マスク」状態の人たちが多くいるように）

しかも辻田氏の述べるように「現在の情報戦はこれまで以上にハイブリッドで、言論統制や愛国ビジネスや自警団的な動きなどが混ざりあっている。にもかかわらず、これらをすべてプロパガンダと称することは、かえって目の前で起こっている事態を見えにくくする恐れがある」

そんななかで辻田氏は「非主流」の動きを含む「二流の歴史」に注目する

「「一流」とされるインテリが繰り出すファクトやエビデンスがいかに無力であるかは、われわれが今日よく知るところだ。ひとは事実ではなく感情で動く。そのため、あえて「二流」の熱情を体感するために、現地取材におもむく必要があった」とし「情報戦の時代、もっとも力をもつのもまた「二流の歴史」だろう」という

本連載の「二流の歴史」という観点からは少し外れるが「新しい情報戦の時代に」どのような情報に向きあえばいいかについて私見を述べておくことにしたい

とくに政治的な要素の少ない項目についてはその間接的に影響する側面のみに注目すればいいだろうが（ある政治的な事象を隠蔽するために道具としてイベントやスキャンダルが使われることにはある程度注意が必要だろうが）

まず新聞やマス・メディアX（旧ツイッター）以外のSNSメディアに関しては基本的にプロパガンダと言論統制に満ちていると考えるのが基本だろう（都合の悪い情報はほとんどが隠蔽され錯誤に満ちている）

これは第二次大戦中の大衆動員と基本的に変わらないしかも与えられた情報や知識を疑わない姿勢は学校教育の時点ではほとんど洗脳状態と化している

書籍においてはバイアスのかかりすぎた情報に対して警鐘を発するものも比較的多くあるが逆にプロパガンダと言論統制を事とするものも多くどちらにせよ書店に足を運び意識的に情報を吟味する姿勢があってはじめてそこからある情報を得ることも可能となるしかしそこで最新の情報を得ることは難しい

清濁あわせのむかたちでさまざまな情報ソースを得ることができるのはX（旧ツイッター）だろうがインターネットは基本的に「アテンション・エコノミー」であるためある程度意識的に関心を持ちえないときさまざまなバイアスを得てしまうことも多くそのままではそこから情報を取ることはむずかしい

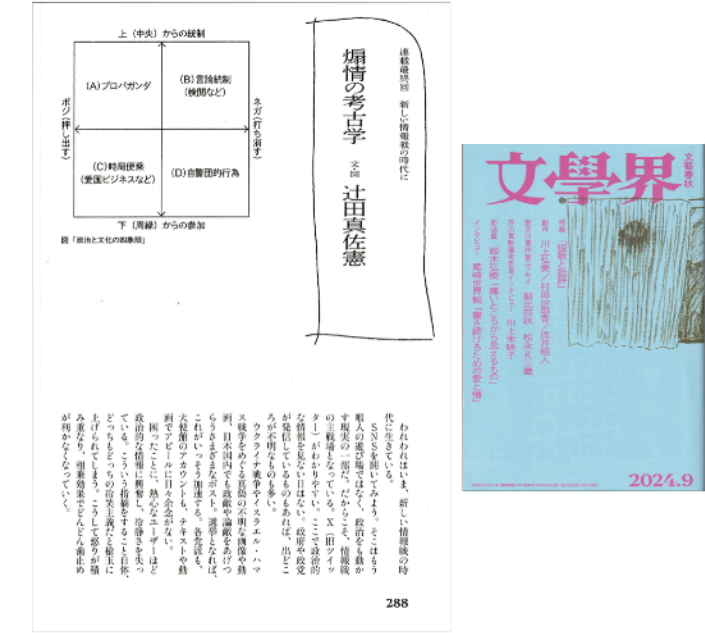
そんななかで何が正しい情報なのかそうでない情報なのかを正確に見定めることは實際上困難な場合が多いため

あるテーマに関していくつかの対立する複数（できれば3つ以上）の情報を比較しそれぞれの情報ソースの出所を確認した上でそれぞれがどんな「利益」あるいは「思想的バイアス」に結びついているかという可能性について吟味する必要がある

そしてそのなかからある程度の一貫性があり「利益」あるいは「思想的バイアス」が比較的少ないであろう情報についての関連情報を集めるその時点でも重要なのはそれを正しい情報だとは速断しないことである

明らかにプロパガンダや言論統制に満ちた情報についてもそれらがどのような情報ソースからどのような仕方で出されているのかを常に注意しておく

どんな情報についてもそれを確認し得るかどうかは別として「なぜそうなのか」という意識を常に持つておくこと



- 別役実『もののけづくし』（ハヤカワ文庫 1999.4）
- 柴田宵曲『完本 妖異博物館』（角川ソフィア文庫 2022/7）

学校教育などで教えられることを疑わないひとは往々にして教えられたことについて疑いをもたずある種の「権威」であるという理由で信じたりもする（たとえ子供でも教科書を疑うことはできるのだけれど・・・）

辻田氏は上記のように「「一流」とされるインテリが繰り出すファクトやエビデンスがいかに無力であるかは、われわれが今日よく知るところだ」と述べているがおそらくそういう段階にはいまだ至っていない

たとえばコロナ禍においても最初のPCR検査という時点で上記のような情報精査ができればそこでそれにまつわる危険な情報は得られていたはずだしワクチンを打つという選択を取らないでいる可能性は高くなる

陰謀論とされることについてもその言葉そのものの出所について意識的であることでそれそのものを無批判に使う「インテリ」からの情報のバイアスによる錯誤から離れていることができる

情報が絶対正しいかどうかというよりはなぜそういう情報と指導が与えられるのかについてはじめに疑問をもっておくだけで最低限の情報リテラシーは確保できるつまり危険な情報とそれがもたらすものに対してみずからの態度を決めるための基礎的な情報を得ることができる

それが「新しい情報戦の時代」において最低限必要な態度ではないかと思われる

『スピノザ全集』（岩波書店/2022年-）の編者
上野修によるスピノザに関する論考集である
ここ三〇年ほどのあいだに書かれたものだそうだが
テーマは「人間ならざる思考」としてのスピノザ

そのなかから序章と終章そして第12章をとりあげる

序章では『風の谷のナウシカ』（コミックス版）
終章では映画「ブレードランナー 2049」をモチーフとし
第一二章ではスピノザとシモーヌ・ヴェイユに共通する
「酷薄の哲学」がとりあげられている

まず序章
なぜ『スピノザ考』が
『風の谷のナウシカ』からはじまっているのか・・・

とりあげられているのはアニメ版ではなく
コミックス版とくに第7巻である
（『風の谷のナウシカ 7』については
mediopos-3036（2023.3.11）でもとりあげている）

アニメ版では「ナウシカは、愚かしい人間と自然を和解させるために、
神々しい「王蟲」のまなざしの中で自らを犠牲として差し出す。
そして大地とのきずなが再び結ばれ……………」
というストーリーだが
コミックスではこうなっている

「浄化する自然であったはずの「腐海」も「王蟲」も、
実は旧世界の人間たちの企てた
「汚染した大地と生物をすべてとりかえる計画」の
産物であることが判明する」
「彼らも「腐海」も、浄化の暁には役目を終えて亡び、
正常な自然と正常な人間たちがそれに交代する」
その秘密を突き止めたナウシカは
「「おだやかな種族」となるはずの未来人類の
「卵」もろとも殲滅するために」
「再生計画の指令装置「墓所の王」へと赴く」…………

「浄化の自然はそこにはない。
美しくも残酷な神＝自然があるだけだ。
それは『エチカ』を強く思わせる。」
というのである

「ナウシカの道はスピノザの
「自然の権利はその力の及ぶところまで及ぶ」を思わせる」

「彼女の決断は亡びの美学とも、自然回帰とも関係がない。
コミックスの最終部で、彼女は人々に対して「嘘」をつき、
一つの真実を隠す。それは、われわれに未来を約束する
自然など存在してはいなかったという真実である」

「彼女の肩にそっと手をおくスピノザが見える。
彼らとともに、正しく「生き亡ぶ」ことを考えること」

『エチカ』と『風の谷のナウシカ』が
描く世界が交差する・・・
ここから「人間ならざる思考」である
スピノザについての論考がはじまっている

第12章ではスピノザとシモーヌ・ヴェイユに共通する
「「情け容赦のない必然」を
自由の条件と考える思考」が語られる

ヴェイユは「酷薄な必然は個人についてみれば
この上なく辛苦である。
だが「宇宙の必然」を愛するとき、
人はそうした辛苦から解き放たれる」といい
スピノザもまた「われわれは理解する限り、
必然的なもの以外は何も欲求できず、
要するに真なるものにしか満足できない」という

スピノザは決定論ではなく必然主義である
「スピノザはそうした現実を、それ自身の必然性によって存在する
「神ないし自然」と考えていた。」
「神は自己原因と言われるまさにその意味で、
すべての事物の原因であるとも言われなければならない」
「事物の必然性がわれわれを行動のほんとうの場所、
現実に戻し、決定論と自由をめぐるあらゆる弁証法の
「神学」からわれわれを自由にするのである。」という

ヴェイユの『重力と恩寵』には「真空」という言葉が頻出するが
「自分の内部にこの真空を持ち堪えるとき、
われわれはもはや希望も恐れもなしにこの現実の一部となる」といい
ヴェイユはそれを真の意味での「恩寵」とであると理解していた

そのような「酷薄の哲学」という点において
「快活で幾何学のように静謐なスピノザ」と
「身をよじるように苦難のイエスに惹かれるヴェイユ」という
一番対照的に見える二人は一致している！というのである

そして終章

スピノザの世界では「モノとその真理」だけが残り
神の似姿としての「人間」が消え
「人間ならざるものの思考へと導かれる」

「「考える私」は消去されはしない」
「むしろわれわれの精神が字義どおり身体の真なる観念、
すなわち恐るべきモノの真理として
神という名の現実の中に存在している」

「だがスピノザによれば、精神は自分がそれであることを知らない。
なぜならその真理を知覚しているのは、
身体の出産と並行して身体観念を帰結する
膨大な数の前提諸観念となった思考、
人間ならざる自然の思考であって、
当の真理である私ではないからである。
われわれは自分を知らない真理なのかもしれない」という



- 上野修『スピノザ考 人間ならざる思考へ』（青土社 2024/5）
- 宮崎駿『風の谷のナウシカ 7』（徳間書店 1994/12）
- シモーヌ・ヴェイユ（富原真弓訳）『重力と恩寵』（岩波文庫 2017/3）
- ドゥニ・ヴィルヌーヴ（監督）『ブレードランナー 2049』（2018/8）

そうして最後に
映画「ブレードランナー 2049」の
ラストシーンがとりあげられている

「レプリカントのKはつかの間自分が
人間なのかもしれない信じそうになるが、
やがてその幻想は破られる。」

「そのとき人間ならざるものが彼となり、
Kは自分がずっとそれであったところの
レプリカントに、今なる。」

「彼が死を間近にしているとしても、
真理に比べれば大した意味はない。
自分はやはり人間ではなかったということの、
息も詰まるほどの自由。」……

わたしたちはどうなのだろうと考える
わたしたちはじぶんが人間である
という夢を見ているのかもしれない

スピノザの「人間ならざる思考」の前で
人間であるというとは
いったいどういうことなのだろうと
考えざるをえなくなる

先日とりあげた

細野晴臣と中沢新一の対談

「精神の音楽を追い求めて」で

「昭和歌謡」についての話があった

(mediopos3555(2024.8.13))

「文藝春秋」で昭和歌謡ベスト3のアンケートがあり

その記事をみて細野晴臣も中沢新一も

「みんな本当の昭和歌謡を挙げていない」と

ショックを受けたという話

「自分が生まれる前の時代の音楽の豊かさは、

掘っても掘っても掘りきれない宝の山」で

「一人の人間が体験した、たかだか十数年の間の

音楽なんかを持ち上げて語っちゃいけない」という

先日とりあげたNODA・MAP第27回公演

『正三角関係』で使われている音楽も

作が野田秀樹（1955年生まれ）ということもあって

ザ・カーナビーツ「好きさ好きさ好きさ」

ザ・モップス「たどりついたらいつも雨ふり」

美空ひばり「お祭りマンボ」といった

「昭和」の音楽だったが

これから時代とともに

なんらかのかたちで継承されてきた日本音楽の

「音楽・言語・音響」が一体となっていた時代は

ますます遠ざかっていくことになりそうだ

そんななか現在では失われようとしている日本音楽について

あらためてとらえなおすことのできる

中村明一『日本音楽の構造』が刊行されている

中村氏はこれまでも「倍音」や「密息」についての書著があったが

それらの研究が集大成された日本音楽論である

付論（A～D）にもあるように

日本音楽は特に「密息」「倍音」「音階論」「リズム」

といった点においていわゆる西洋音楽とはずいぶん異なっている

■中村明一『日本音楽の構造』（アルテスパブリッシング 2024/3）

明治のはじめ国家が西洋の音楽をとりいれ

西洋に追いつくことを第一とした音楽教育によって

「私たち日本人は、過去数千年来の伝統的な音楽による、

深く、細やかなコミュニケーションを失っていった」

「元来は、言語、音響と同じシステムでできている音楽」が

西洋音楽教育によって

「共同体としての言語・音楽・音響の

総合的なコミュニケーションを失ってしま」う

ことになったのである

「言語・音楽・音響をつないでいるのは倍音」だが

意味と倍音が切っても切れない関係にある日本語において

「その意味と倍音との関係を切って」しまうことで

「ダブル・バインド（二重拘束）」状態に陥っている

「言語の論理構造（意味）とその伝達のされ方（音響）の両面」を

結びつけているのは「倍音」で

日本語と音楽は「母音が主体であり、非整数次倍音を用いて

強調などの表現をするというシステム」をもっているために

「深い意味を持った言葉であっても、

日本の歌を西洋的な発声と唱法で歌うかぎり、

音響的な意味まで含めた全体を伝えることはできない」のである

本書ではとくにはふれられていないが

こうした西洋音楽の受容によって

（かつては中国からの漢字の受容によって）

生み出されてくる創造的な要素もあると思われ

日本語が漢字・平仮名・片仮名

さらにはアルファベット等まで柔軟に組み込みながら

変容していくように

音楽に関してもそうした側面にも注目が必要だろうが

だからこそ

「言語・音楽・音響をつないでいる」「倍音」を中心とした

日本音楽についてあらためて実践的体験的なかたちで

再受容していくことは急務ではないかと思われる

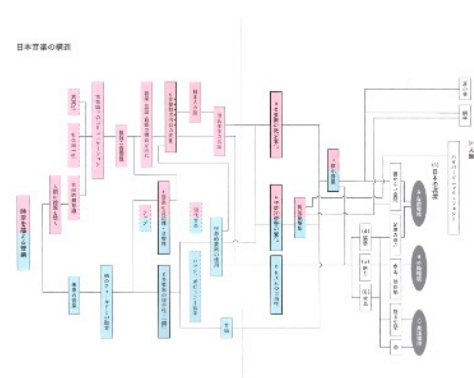


表2 言語・音楽・音響の構造

	日本	西洋
言語	母音 整数次倍音	子音 非整数次倍音
表現要素	非整数次倍音	音響
音楽	母音 整数次倍音	母音 整数次倍音
表現要素	非整数次倍音	音響
音響	整数次倍音 非整数次倍音	整数次倍音 非整数次倍音

表3 整数次倍音・非整数次倍音の比較表

		整数次倍音	非整数次倍音
周波数		基音の整数倍	基音の非整数倍
波形		規則正しい	不規則
言語		母音	子音（母音の強調）
聴感上の特徴		ギラギラ	カサカサ
効果		カリスマ性、荘厳さ	重要性、親近性
【例】	歌手の声	美空ひばり 氷川きよし	森進一 桑田佳祐
	謡声	黒柳徹子 タモリ	堺正章 ビートたけし
	歌	ブルガリアン・ヴォイス	義太夫節
	楽器	チャルメラ	ケーナ

あらためて説明するまでもないだろうが

「西暦」はイエスの生まれた年から始まってはいない
それでも西暦は基督教の西欧のために
設けられた暦のシステムである

AD（Anno Domini キリスト起源）が
流行するようになったのは
八世紀から一一世紀になってからのこと

西暦とされている最初の五〇〇年間は
最初の世紀とされる一〇〇年を
一世紀と呼んだキリスト教徒はいなかった

AD（CE（Common Era共通起源）とも表記されるようだが）
の暦が生まれるにあたっては
ムハンマドと信者たちがメッカからメディナへ移住した
「ヒジュラ」（六二二）からの年代測定が行われた影響から
それまで使われていたローマやギリシアの文字による
煩雑な数体系が放棄され
ヒンドゥー・アラブ世界の十進法を採用されるようになった

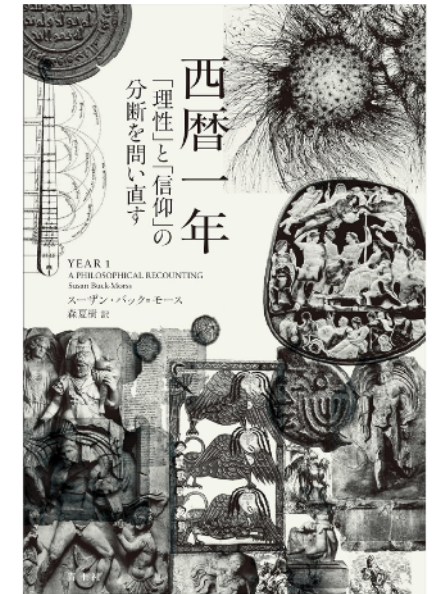
なにか隠された意味のようなものがあるのかもしれないが
ふつうに考えると西暦一年を起点に時間を分割する
というのは「無意味な便利さにすぎない」
（松岡正剛の『情報の歴史』のように
世界で同時代に起こっていることを一覧するのは便利だが）

本書スーザン・バック モース『西暦一年』は
「近代的なもののあらゆるスキーマ（概念）
時間、空間、概念の差別、集団的帰属意識のカテゴリー」を
規定している「疑わしい始まり」から
共通の基盤としての西暦一年を取り戻すために
過去を解放するための試みである

そのためにバック＝モースは
一世紀の半ばに活躍し『ユダヤ戦記』を書いた
フラウィウス・ヨセフス
世紀の初頭を生きて七十人訳聖書に評釈を施した
新プラトン派の哲学者であるアレクサンドリアのフィロン
そして新約聖書の「黙示録」を書いたパトモス島のヨハネ
という三人をとりあげることで



■スーザン・バック＝モース（森夏樹訳）『西暦一年』（青土社 2021/8）
■松岡正剛監修・編集工学研究所&イシス編集学校構成
『情報の歴史』（編集工学研究所 2021/4）



現在基督教による近代的なスキーマから解放し
それぞれの本来の姿を取り戻しながら
さらに現代にまで至るさまざまなもののつながり
「コンステレーション」（布置・星座）を描いてみせる

バック＝モースは本書の最後にこう記している

「近代性そのものから脱落すること。」

「哲学的な歴史とは、過去を固定している
拘束力のある秩序を元に戻すことだ。」
「任務は、過去を封じ込めようとする概念から
過去を解放することであり、
近代のコンテンツとしての歴史の
構造化されたスキーマを中断することである。」
（「任務」（Aufgabe）という言葉はベンヤミンから）

私たちは近代的なスキーマをはじめとして
さまざまな「概念」「観念」にとらわれて生き
そのなかでしかみずからを位置づけられず
過去の歴史で起こったさまざまなものの
創造的な「コンステレーション」を
描けなくなっているのではないか

まだキリスト歴などというもののなかった
「西暦一年」を見直してみることをきっかけに
さまざまなことがらを問い直してみることで
じぶんが知らずにとらわれているものに気づき
その思い込みから外れることで
それらのあらたな姿や関係を発見できますように

『嘘の真理（ほんと）』は
ジャン＝リュック・ナンシーの
二〇一八年の講演録

講演の冒頭で
「私にとって嘘というのは、
これまで講演会で取り上げた話題のなかでも
一番難しい主題ではないかと思います」
と語られているが

主に比較的若い人たちもふくめた人たちに向けて
平易に語られているにもかかわらず
とても深い内容となっている
いうまでもなく「嘘をついてはいけない」
というような単純な話ではない

タイトルにある『嘘の真理（ほんと）』の
「真理」というのは
「ほんと」とルビがふられているように
その内容が客観的に真か偽かといったようなことではなく
嘘をつくひとの「ほんと」「本音」ということ

おそらく嘘を絶対につかないという人はいない
嘘をつきたくはないと思っていても
相手に向かって面と向かっていつも
「ほんと」（だと思っていること）を言うわけにはいかない

「嘘が持っている本当の側面、
嘘の真理というのは単純では」なく
「嘘は本当のことではない、
と主張するだけでは十分ではない」から

嘘を言うか言わないか
そこには他者への「信頼」が関係している
「嘘をつくときには、誰かへの信頼を引っ込めているように」

つまり「嘘は根本的に、まさしく他人への関係」であって
「他人との関係の中では、
ときに嘘をつくよう求められることも」あるが
それは「信頼するための条件が揃っていないから」だといえる

■ジャン＝リュック・ナンシー（柿並良佑訳）『嘘の真理（ほんと）』
（講談社選書メチエ 2024/5）

そして「嘘」の本質には何を隠す「隠蔽」
裏切りにもなる「告発」
そして「自分を価値ある人物にするため」の「承認」のように
さまざまな形がある

講演の最後には
「嘘の特徴としてよく挙げられる二つの形」
フィクションとイデオロギーがとりあげられている

文学・映画・演劇といったフィクションは
いうまでもなく「嘘」ではなく
「「フィクション」の元になったラテン語の言葉
（動詞fingerereおよび名詞fictio）が
「何かを製作すること、粘土などを捏ねて形を作ること」を
意味しているように創造的な「創作」に他ならないが

「～イズム」で終わる単語
典型的に言えばイデオロギーについては
「そうした嘘の目的は大きな集合体で私たちを包み込」む
「空理空論」であって「こうした言葉を信頼する人たち」は
「みんなに嘘をついていて、自分たち自身にも嘘をついている」とい
う

ジャン＝リュック・ナンシーは
「安心を求めようとしてはだめ」だという
「色々と確信できることは必要」だが
「確信したい、安心したいという欲望や欲求に
騙されてはいけ」ないという

「嘘はいつでも自分自身を安心させるための誘惑」
「自分を守り、自分を立派なものに見せるため、
またイデオロギーの場合には、
自分に確固たる強さを与えるための誘惑」から生まれる

重要なのは「他人との関係の中で何をすべきか知ること、
他人と一緒にいてどんな意味があるのかを知ること」だという
「仮に私たちがみな一人ぼっちだったら、
嘘をつく必要も、本当のこと、真理を言う必要もない」のだから



中沢新一の「対称性人類学」は
レヴィ＝ストロースの構造主義から
さまざまに影響を受け展開されている

それは分裂してしまっている
「人間と自然の再統合という構造主義の夢」の
実現に向けられている

その夢の実現のためには
「その基礎に対称性の原理を据える必要がある」と
いうのである

その「対称性」を表しているのが
「互酬性の理論」である

そこには「構造の奥」があり
私たちが「未来」へ向けて
見つけ出さなければならない
レヴィ＝ストロースのいう「隠れた輪」がある

三次元空間において私たちが見出している
「二元論的構造」より高次元の
「三元論的構造」を見出すためには

トポロジーで表現される「二元論的構造」としての
表と裏が分離されている球面またはトーラスの視点に

「裏と表を「媒介して」つなぐ第三項」によって
「切れ目を入れた表面で向かい合っている辺をねじって、
自己交叉を起こさせ」る
「射影平面」と「クライン管」の
構造をつくらなければならない

レヴィ＝ストロースが神話における「隠れた輪」を
見出そうとしたのは
神話はクライン管の構造をしているからである
そうした「隠れた輪」を利用して
「神話は複雑な変換をやすやすとこなしていく」

「二元論的構造では起こり得なかった価値転換が、
三元論的構造の上ではやすやすと実現されていくのである」

神話だけではなく
「精神分析学も射影平面やクライン管のイメージを利用して、
心の解明をおこなってきた」

「贈与」においても
「三元論的トポロジーの介入」が起こっていて
そこには二元論的構造では矛盾でしかない
「別のはるかに複雑な構造」をした「構造の奥」において
無意識的な対称性の原理が働いている

『対称性人類学』において中沢新一は
「対称性無意識とは、
私たちの「心」の働きを生み出している
「自然」」にほかならないと述べている

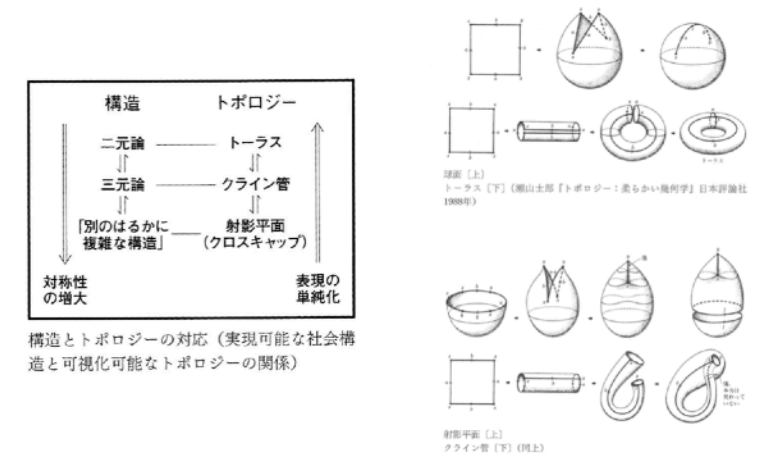
そしてその前の著作『緑の資本論』において
「モノとの新しい同盟関係の創造が、
いまこそ求められている。」
と精神と物質の分裂を根源的な「モノ」を
見直すことがすでに示唆されていた

ここからは中沢新一の議論からを踏み越えることになるが
おそらく『構造の奥』にあるのは
仏教でいう「縁起」と神秘学的なカルマ論とが交叉する
「別のはるかに複雑な構造」ではないか

それは「与えるものが与えられる」原理が
物質・エーテル体・アストラル体・自我といった構造において
交差し「縁起」しながら展開されている現象ではないかと

私たちは地上的な物質世界におけるあらわれを
「二元論的構造」としてしかとらえることができず
さまざまな矛盾を抱えながら生きているが
そこにあらわれているのはより高次元の「三元論的構造」
さらにはそれより高次の諸構造からの「射影」であり
さまざまなかたちにおける「構造の奥」を見出すためには
それに応じた認識が求められるということにほかならない

「人間と自然の再統合という構造主義の夢」は
あらゆる諸存在における宇宙進化の夢としても
さらに展開されていく必要があるのではないか



- 中沢新一『構造の奥 レヴィ＝ストロース論』（講談社選書メチエ 2024/4）
- 中沢新一『対称性人類学（カイエ・ソバージュV）』（講談社選書メチエ 2004/2）
- 中沢新一『緑の資本論』（集英社 2002/5）

「顔」には
わたしがわたしであることを
そしてその人がその人であることを
識別するときのもっとも重要な役割がある

もし鏡にうつるじぶんの顔が
それまでじぶんの顔だと思っていたものと
まったく異なっていたとしたら
わたしはじぶんがじぶんであるという自己認識が
ゆらいでしまうことになるだろう

じぶんの知っている人の顔も同様で
その人だと思っている人の顔が
著しく異なってしまっているか
あるいはまったく別人のようになっていたとしたら
その人に対するイメージも変わってこざるをえない

昨今では「顔認証」というテクノロジーも進み
「顔」のかたちがその人がその人であることを
社会的に保証する重要なものともなってきたているが

そのようなデジタル時代を迎えているいま
ネット上は加工された顔や
ヴァーチャルにしか存在しない顔なども多く
またメイク技術の進歩もあって
メイクによってまったく別人のような顔がつくられたり
マスク技術によって仮面を被るだけで
まったく別人に変身することも難しくはなくなっている

そんな現状だからこそ
「顔」とは何なのか
「顔」が「その人」であるということは
どんな意味をもっているのか
また「その人」が「その人」であるためには
「顔」だけが重要なのかどうか
そうしたことを考えておく必要があると思われる

中野珠実『顔に取り憑かれた脳』（講談社現代新書）では
「脳科学や心理学、それに人工知能などの
情報科学に焦点を当てながら
「顔」と「脳」の密接で精巧な関係を紹介し、
その関係性が「わたし」という自己意識の形成にまで
影響を与えること」について考察がくわえられている

「脳の底面には、顔を見分ける
巨大な神経ネットワークがそなわり、
脳の横には相手の心を読み取るために必要な
「動き」に関するネットワーク」があって
「人はこうした脳の活動で他者の顔から
さまざまな情報を読み取っている」

子どもの発達においては「鏡像段階」があり
「鏡像が実像ではなく虚像であることを理解し、
鏡や写真にうつる親の姿を認識するようになり」
その「半年後には、鏡に映る自己の姿が
自分であることに気がつくようにな」り

「運動と視覚像の随伴現象に基づき、
鏡の象徴化機能を獲得し、
そして、Iとmeを結びつける同一化機能を獲得することで、
社会的な自己意識が形成されるようになる」

しかし「カブグラ症候群」という
顔を認識するネットワークに問題がないにもかかわらず
「外見が瓜二つの別人が自分の家族になりすましている、
という妄想を抱く」という症例がある

これについてはmediopos-164（2015.4.28）で
新山喜嗣『ソシアの錯覚／可能世界と他者』（春秋社）を
紹介したことがあるが

それは「自分のもっとも身近にいる他者が、
ある日突然に顔だちがそっくりのにせものに
入れ替わったと感じる体験をさし」
「顔だちがそっくりであるばかりでなく、
たとえしぐさや性格から始まるあらゆる特徴が
以前と全く変わりがなくとも」
「相手が本物ではない別人であると感じてしま」うというものだ

「顔」についての考察においては
鷺田清一『顔の現象学』が知られているが
そこではある顔を「素顔」としてとらえるとき
私たちは「その背後に、一つの人称的な存在」
「「だれか」（＝人格）としての自己同一性と連続性とをもち、
顔の外面性に対しては内面性としてとらえられるべき存在」を
透かし見ているという

また安部公房の小説『他人の顔』は
顔全体に大やけどを負って顔を喪失してしまった男の話だが
「人間という存在のなかで、顔というものが
いかに大きな比重を占めているかを浮き彫りにして」いる



- 中野珠実『顔に取り憑かれた脳』（講談社現代新書 2023/12）
- 鷺田清一『顔の現象学 見られることの権利』（講談社学術文庫 1998/11）
- 安部公房『他人の顔』（新潮文庫 1968/12）
- 新山喜嗣『ソシアの錯覚／可能世界と他者』（春秋社 2011.8）

「素顔であれ、仮面であれ、
外面は常に自己の内面と深い関わりを持っており、
しかも、その自己の内面は、
外面の影響を受けて容易に変化する、
可塑的で不安定なもの」であって
「いずれの外面も、
他者の反応から自己の顔を想像するという点で、
自己と他者の関係性からつくられる想像的共有物」
にほかならない

そんななかで「顔」とはなんだろうと考えるとき
私たちが通常依存している視覚やそのほかの感覚が
まったく働かないとき
わたしがわたしであることや
その人がその人であることが
どうやって認識できるのだろうかという問いも生まれる

顔＝ペルソナ＝人格
そうしたものをかりそめにもつくり
支えているのはいったい何なのだろうか

たとえば死後肉体を失ったとき（死後の生だが）
じぶんをじぶんだと認識し
じぶん以外の存在をそれとして認識するのは
いったい何によってなのだろうか

E T H（スイス連邦工科大学）レクチャーの第一巻『近代心理学の歴史』に続き
翌一九三四年の夏学期に行われた二つ目の講義録『意識と無意識』（全12回の連続講義）が訳されている（第一巻『近代心理学の歴史』についてはmediopos-2116（2020.9.1）でとりあげている）

この講義の目的は前年度の講義とは異なり対象となっているのは一般聴衆であり
ユング心理学を知るための入口となる基礎的な概念である「意識と無意識」という考え方
「思考」「感情」「感覚」「直観」という私たちが世界と関わるための四つの心的機能や「タイプ」によって変化する世界の様相「言語連想検査」の方法とその事例「夢の臨床」に関する事例などについて説かれている

この講義が行われた一九三四年の時点ですでに論じられていた「内向と外向」「ペルソナ」「アニマ／アニムス」といった概念やユングがこの頃没頭していた錬金術に関することについてはほとんど語られてはいない
一般聴衆向けの入門的なものとしてわかりやすく伝えることを講義の目的としていたようだが

たとえば第2講の最初に
「「心に単純なものはありません。
「単純な」検査があると云われますが、
そんなものは存在しないと断言しましょう。」
と語られているように

「心の現象」を安易に図式化したり
わかりやすく単純化したりすることなく
ほんらい謎に満ている「心」のことを
できるだけそのまま伝えようする姿勢が貫かれている

今回はその12回の連続講義の前半の内容から
テーマのいくつかについてふれておくことにしたい

第2講では「意識と無意識」という考え方の
基本的な前提となるものが示唆されている

「心に単純なものはありません」というように
心的なプロセスに関しては
「事実を忠実に伝えることはほとんど不可能」だという
「意識とは別に、無意識の過程という
明確に定められない大きな領域が存在していて、
私たちが気づかないうちに、それはいつでも入りこんでくる」
からである

- C・G・ユング（E・ファルツェーダー 編集／河合俊雄監修・猪股剛・宮澤淳滋・長堀加奈子訳）『意識と無意識』（ETHレクチャー第2巻,1934／創元社 2024/6）
- C・G・ユング（林道義訳）『タイプ論』（みすず書房 1987/5）
- C・G・ユング／E・ファルツェーダー編（河合俊雄編 猪俣剛・小木曾由佳・宮澤淳滋・鹿野友章 訳）『E T Hレクチャー版第1巻 一九三三-一九三四 近代心理学の歴史』（創元社 2020.8）

私たちの意識はごく小さな範囲に限られていて
ある程度明確にすることができるのは
「意識が集中した状態にあるときに限ら」れる
「意識が集中すればするほど、意識の対象の数は少くな」る

魂は全体であるのに対して
「意識は海上の小さな島のように」であり
「魂の一部」でしかないため
「全的な人物でありたければ、
無意識の話を開く準備も常に整えておかねば」ならないという

第3講からは「感覚・思考・感情・直観」という
世界の捉え方を中心に基本的な概念が説かれていく

「意識」とは「一つの構造化された有機体」であり
「感覚・思考・感情・直観」といった
さまざまな機能を区別して見ていくことができる

その「心的大系の諸機能を、平面的な円形で表すと」
「思考と感情」「感覚と直観」を対極にもった
方位図形として表現することができる

思考と感情はともに合理的機能をもつとされるが
それに対して感覚と直観は合理的ではありえない

また両者の間には一定の矛盾があり
思考が優勢であれば感情は劣勢
逆に感情が優勢であれば思考は劣勢である
感覚と直観についても同様である

そして「誰であっても、四つの機能すべてを
同じだけ使うことはでき」ない
思考も感情もともに優勢だったり
感覚と直観がともに優勢だったりすることはない

しかもそれらの機能は
「中心にある「私」と結びついてい」て
「〈私〉と結びついているものだけが意識される」
逆にいえば〈私〉と結びついていないものは意識されない

注目すべきは第5講で
ほかの著作や講義では論じられていない心の機能である
「意志」が第五番目の機能として位置づけられている

それは上記の四つの機能の上位にあって
「〈私〉の中心的な機能」であるという

しかもこの「意志」は「本能ではなく、
文化の歴史によって獲得されたもの」だといい
「通過儀礼によってそうした気分押し込められなければ、
自由に使えるエネルギーを持た」ない

「意志は人間が達成したものであり、
そのためそれは常に高度な文化の印」であるという

ある意味で「意志」を獲得するということと
「私」という個としての意識の成立は
深く関係しているともいえるかもしれない

かつて意識は集合的なものだったからだろう
それが自我の成立にともなって
「文化的」に生まれてきた・・・

ユングにとって〈私〉とは
「実際にはほとんど知ることのできないもので、
高度に神秘的な、大いなる謎」であるという

その「大いなる謎」としての〈私〉こそが
錬金術的なプロセスを経て
〈個性化〉へと向かう可能性を含んだものだというのが
ユングの心理学的探求の根底にある



塚田幸三はルドルフ・シュタイナーを
道元・妙好人・池田晶子などと比較した著書を書かれているが
先日久々『道元とシュタイナー（II）』という著書を見つけた
以前刊行されていた『道元とシュタイナー』（水声社）の続編であり
道元の「身心脱落・脱落身心」等について示唆されている

シュタイナーは一九一一年の講演で
「今日の靈学の内容は、浄飯王の子である菩薩が
仏陀となった時に説いた東洋の靈智と変わるところはありません」
と述べているが

いうまでもなくブッダの時代の後
キリスト事件が起こり
その衝動を通じ
人類は仏教とキリスト教の融合を経験しているが
人智学もそれを推し進める象徴的な動きでもあるだろう

ちなみに仏教においては
輪廻は無明から脱していないことになるが
道元においても
またシュタイナーにおいても
輪廻は否定的な意味でとらえられてはいない

キリスト事件において重要なのが
イエスにキリストが降りて「人の子」
つまり人間として身体をもち
死の後に復活したということであるように
そこでは身体が重要な鍵となっている

シュタイナーは
「なぜ私たちは最高の満足と最高の浄福を
受けとれるはずの天国にしながら、
あたかも牢獄の中に閉じ込められているかのように感じるのか
という疑問に対して、それは私たちの中に受肉している存在が
それほどに小さいからである、そのことに気づけば
私たちはさらなる地上生活を求めざるを得なくなる」という

道元もまた
「この法は、人人の分上にゆたかにそなわりといえども、
いまだ修行せざるにはあらわれず、証すせざるにはうることなし」
（「弁道話」）といい
自他力一如の身心脱落・脱落身心を説いている

仏教的な輪廻を脱する「解脱」ではなく
「身心一如」こそが重要なのである

そのテーマに関連して
禅とキリスト教を比較研究した
神学者・宗教学者である
門脇佳吉(1926/1/6-2017/7/27) の
『身の形而上学』（1994）という
「道元と聖書における智慧に満ちた全身論」での示唆を
あわせてみておきたい

門脇佳吉は西洋にも智慧の思想の伝統はあったが
精神に宿る智慧であったため
「身心を完全に統一して「身」になしうるものではない」とし

「現代人の身心は合理主義の見えざる圧迫のもとに
分離しているにもかかわらず、精神に宿る智慧では、
この身心分離の深傷を医す力を所有していない」ため

「智慧に満ちた全身」としての
「身の形而上学（メタ・エチカ）」の思想を通じ
道元の『正法眼蔵』と同様に
聖書を宗教体験の書と解し
「人間と自然との宇宙論的一体性」
つまり「身心一如」を示唆している

道元が説いたように
仏道を学ぶとは「自己をならふ」ことであり
自己とは「尽十方世界真実人体」
（尽十方世界がそのまま真実人体である）という事実を
身体で実証していくことである

その身体とは
私たちのだれもが生きて死ぬ「生身」としての
「生死去来真実身体」だが
道元は「只管打坐」によって
世界と一である「真実人体」を
道の「活き」に満たされた身心一如であるべく
「證悟」することを説く



- 塚田幸三『道元とシュタイナー（II）』（千書房 2024/2）
- 門脇佳吉『身の形而上学 道元と聖書における智慧に満ちた全身論』（岩波書店 1994/5）
- 道元『日本古典文学大系 81 正法眼蔵/正法眼蔵随記』（岩波書店 1965/12）
- ルドルフ・シュタイナー(西川隆範訳)『仏陀からキリストへ』（水声社 1991/5）
- ルドルフ・シュタイナー(高橋巖訳)『人智学・心智学・靈智学』（ちくま学芸文庫 2007/10）

「自己をならふ」こと
そのために身心一如として生き
「智慧に満ちた全身」となること

シュタイナーの靈的認識の獲得も
たんなる知識ではなく
「智慧に満ちた全身」へ向けての
身心一如を示唆しているのだといえる

☆mediopos-3568 2024.8.26

mediopos3531 (2024.7.18) でとりあげた

DISTANCE media (F6 記憶のケア) のシリーズ

山本貴光「記憶という庭を世話する」と

【対談】柴崎友香×山本貴光「記憶をめぐるトーク#1」に続き

「#2」および「#3」をとりあげる

(対談・座談の様子はYouTubeで視聴できます)

「記憶をめぐるトーク#2」は

【対談】谷川嘉浩 × ドミニク・チェン

記憶をとりまくメディア環境はいまどうなっているのか？

対談は谷川嘉浩の著書

スマホ依存への気づきから書かれたという

『スマホ時代の哲学——失われた孤独をめぐる冒険』

の話からはじまる

そこで紹介されている概念のひとつが

ジョン・キーツの提唱した「ネガティブ・ケイパビリティ」

不確実なものや未解決のものを受容する能力のこと

「私たちは、わからないことをわからないまま

一旦キープすることができなくなっている。

あるいは、人が何かを語り出そうとしているときにも、

黙ってその沈黙を見つめることができなくなっている。

そんな落ち着きのない私たちには」

「ネガティブ・ケイパビリティが必要なんじゃないかと思った」

という

続いて語られるのは

「身体」という「原初のメディア」と「コンピュータ」の対比

ドミニク・チェンは

「歴史を振り返ると、

人間とコンピュータの関係には興味深い反転があった」という

もともと人間の記憶とコンピュータの記録のあり方は

根本的に異なっているにもかかわらず

「あるときから私たちは、むしろ人間を

コンピュータに引き寄せて考えるようになってきた」

「私たちの身体は壊れたコンピュータみたいなもので、

現代はそこに、非常に合理的なツールである

コンピュータというものが融合しつつも、

摩擦を起こしている部分がどうしても残ってしまっている

——それが現状なのかもしれない」というのである

対話の終わりにはドミニク・チェンの頭に浮かんだという

「スマホは精神のコンビニ」という言葉から

スマホとコンビニの共通点について語られる

続く「記憶をめぐるトーク#3」は

【座談】

柴崎友香 × 谷川嘉浩 × 山本貴光 × ドミニク・チェン

わたしたちはこれから記憶をどう世話していけばいいのか？

座談の最初に指摘されるのは

「現代社会においてはしばしば

コンテクスト（文脈）を欠きがちだ」ということ

「文脈が失われがちな時代に私たちが生きているからこそ、

あの人と話したのがいつ、どこでだったのか——

そうした記憶がこぼれ落ちていってしまう」

のかもしれないという

逆に言えば「文脈を取り戻すことができれば、

記憶とよりよく付き合っていける」と

文脈を取り戻すためのアイデアについて語られる

続いてドミニク・チェンが提案するのは「移動」

「移動することによって、相手との距離や周りを見ながら、

私たちは自分を相対化することができる」

それは柴崎友香の挙げた「身体性」ともつながるもので

「スマートフォンばかり使っていると

記憶が鈍くなってしまうのは、そこに身体性がないから」

だという

さらに谷川嘉浩は

「節目を入れる、区切れを入れるという要素が、

スマホには少ないんじゃないか」と

「儀式」の大切さについてふれている

会場からの質問に対しては

谷川嘉浩が「記憶をめぐるトーク#2」で紹介した

「ネガティブ・ケイパビリティ」についてあらためてふれられ

「「すぐに答えを出さない力」はいま、

私たち一人ひとりが身に着けなくてはいけない

能力だと言える」かもしれないという

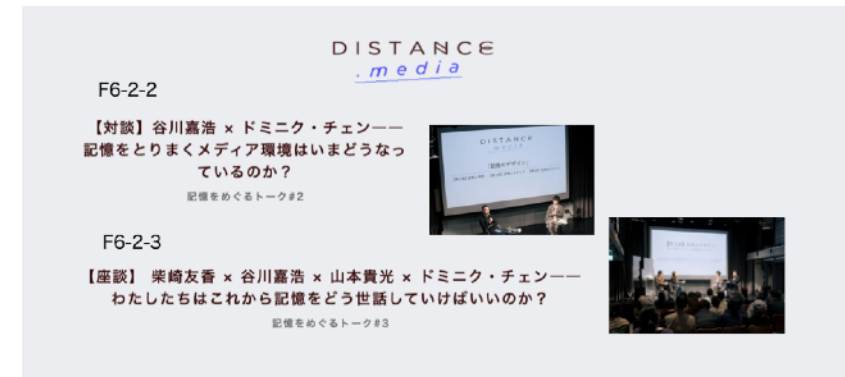
そして「現代のメディアやアルゴリズムが

私たちを「思考停止」にさせようとしてくるなかで、

一人ひとりがそれに抗い、

よりよく記憶の世話をしていくための

たくさんのヒントが語られ」る



- DISTANCE media (F6 記憶のケア)
 - F6-2-2 【対談】 谷川嘉浩 × ドミニク・チェン——記憶をとりまくメディア環境はいまどうなっているのか？
 - F6-2-3 【座談】 柴崎友香 × 谷川嘉浩 × 山本貴光 × ドミニク・チェン——わたしたちはこれから記憶をどう世話していけばいいのか？
- 谷川嘉浩『スマホ時代の哲学 失われた孤独をめぐる冒険』(ディスカヴァー・トゥエンティワン 2022/11)

「#2」および「#3」については以上だが

「じぶんで考える」ということは

たてまえとしてはよく語られるものの

実際のところ学校教育をはじめ各種メディアでは

むしろ「じぶんで考えてはいけない」かのように

さまざまな「答え」与えられるか

あるいはそれへの誘導がなされている

そこに「スマホ」が与えられることで

ますます「問い」のない「答え」が増殖し

「私が私である」ための「記憶」が

コンピュータのメモリのなかの

記憶のようなものになっていく

かつて寺山修司は「書を捨てよ」といったが

いまや「スマホを捨てよ」と

言わなければならない時代になっているのかもしれない

ある意味ではスマホはドラッグのようにさえなっている

じっさい片手にスマホをもって歩いている人たちをみると

すでにはんぶん人間（もしくは「私」）を捨てている存在

あるいは新種の妖怪のようにも見えてくる…

「しっぽ学（しっぽろじー）」の本である

本書にはでてこない（でてくるはずもない）が
「しっぽ」といえば
ぼくのなかでは吾妻ひでおの
「るなてっく」シリーズに登場している
「シッポがない」というキャラクターである

調べてみるとこのキャラクターは
吾妻ひでおの人気No1キャラクターでもあるそうで
1980年7月から2001年まで活動した
「吾妻ひでおFCしっぽがない」という
関西のアジマニア7名によるFCがあったとのこと

このキャラクターがウケたのは
「シッポがある」ではなく
「シッポがない」という
「ある」よりも「ない」
失くすことで喚起される郷愁のためではないか

トカゲのシッポ切りというのがあり
身を守るためにはあえて
自分でシッポを切り落とすが
そのシッポはやがて再生する

神秘学的に言えば
そうした再生能力を失うことで
人間は思考する力を得たのだというが

「シッポがない」ということが
どこかで「あるはずのものが無い」
「かつてはあったものを失くしてしまった」
という無意識の郷愁をもたらすのではないか……

と余計な前置きが長くなったが
東島沙弥佳『しっぽ学』を手にとることになったのは
その「シッポがない」を思い出し

さらには「しっぽ学」という
これまでどこにもなかった「学-logy」を
歩んできている東島沙弥佳の学者としての姿勢に
共感したからである

専門に閉じ細分化された現状のなかで
これまでになかった横断的な「学-logy」へのアプローチは
「裏切り者」や「半端物」などと
言われたこともあるそうだが

著者にとって「〇〇学というのは、
何か知りたいことを知るために使う
材料や方法の分類にすぎ」ず
「もっぱら扱っている「しっぽ」というものでさえ、
もっと大きなものを知るためのツール」であって

「しっぽ学というのは、しっぽという
一つの研究対象を様々な角度から見てみることで、
その先に、我々がどのように「ひと」となったのかを
見出そうという研究なのである」のだという

細分化された専門のなかで閉じてしまえば
「何かを明らかにしたいときに
一種類の手法や取り組みだけで」はいまくいかない

著者は「「ひと」を知りたいきゃ、まずしっぽを見よ」という
ここでいう平仮名の「ひと」は
生物としての側面である「ヒト」と
人間ならではの側面である「人」とを総合したもの

「ひと」を知るための「しっぽ学」である

さて肝心な「しっぽ」についていくつか見ておくことにする

まず霊長類における
しっぽがある／なしの境界線

英語表現でいえば
しっぽがある霊長類はmonkey（モンキー）であり
しっぽのない霊長類はape（エイプ）である
日本語でいえばエイプは「類人猿」
ちなみに映画の『猿の惑星』の原題は『Planet of the Apes』

さてヒトはおおよそ1800万年前の化石では
すでにしっぽを失っていたというが
「この時期に相当する化石がまだ一切見つかっておらず、
ヒトはいつ・どのように・なぜしっぽを失くしたのかは
全く分からない」でいるという

また「ヒトはなぜしっぽを失くしたのか」についても
現在は「緩慢運動への適応説」が提唱されているが
仮説を裏づけるための証拠はなく
また著者はこの仮説にも納得できていないため
試行錯誤しているところだという

「ヒトはなぜしっぽを失くした」といっても
発生生物学的に言えばヒトにも
しっぽが生えていた時期があって
生まれる前までにそれが完全に消えてしまうプロセスがある

胚子期の始め頃胴体が後方へとずんずん伸びていく
「体軸伸長」という時期があり
しっぽが伸びきった直後にわずか2日ほどの間に
「せっかく椎骨の元まで立派に備えて作られたしっぽが、
消え去ってしまう」のだという

最初にふれたように著者の「しっぽ学」は
「「人」の成り立ちを知るのにも、
しっぽが非常に重要な鍵を握っていると考えている」ように
人間ならではの側面としての「人」も研究対象である

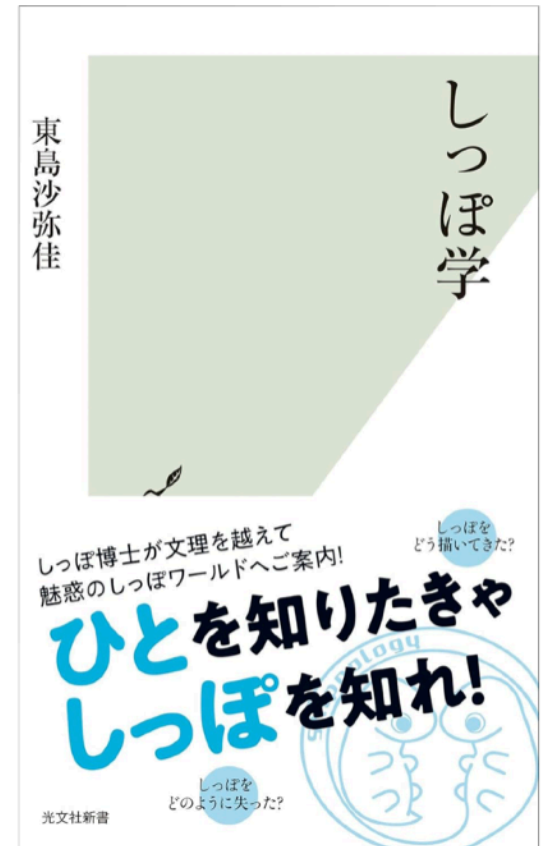
そのなかから興味深いところを少しばかり

ルネサンス期以降のキリスト教文化圏では
「悪魔にはしっぽが描かれるが、天使にはしっぽがない」ように
しっぽがネガティブな存在であるのに対し
ヒンドゥー教文化圏では逆だという
それは竜（ドラゴン）に対するイメージとも似ているようだ

日本には九尾の狐というのが知られているが
「善なるものにしても悪なるものにしても、
複数のしっぽを持つ動物は通常の動物とは異なり、
なんらかの力を有していると表現されることが多い」

おそらく上記のことで見えてくるのは
いわゆる西洋と東洋における
自然に対する基本的な捉え方の違いなのだろう

「しっぽ学」が見せてくれる
「ひと」を知るための射程は思いがけず広く深そうだ



吾妻ひでお

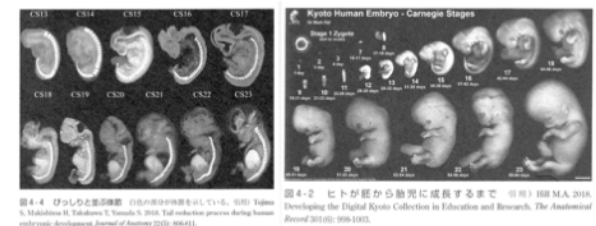


図4-4 ひつしりとは無関係 白色の部分が後肢をいしている。引用) Takano S, Matsuda H, Takahara Y, Yamada S. 2016. Tail reduction process during human embryonic development. Journal of Anatomy 220: 988-991.

図4-2 ヒトが胚から胎児に成長するまで 参考) IHR M.A. 2016. Developing the Digital Kyoto Collection in Education and Research. The Anatomical Record 353(6): 956-958.

「ひっくり返す」のは常識である
そのために「そもそも」を問う
そんな人類学

奥野克巳『ひっくり返す人類学』が
問いかけている「そもそも」は
学校や教育
貧富の格差や権力
心の病や死
自然と人間との関係
という四つの常識である

まず学校や教育について

たとえば「ヘヤー・インディアン文化には
「教えてあげる」、「教えてもらう」、
「誰々から習う」、「誰々から教わる」
という考え方自体がない」
従って「師弟関係」というものもない

彼らの文化には
「人間が人間に対して、指示・命令できるものではない」
という前提があって
「人間に対して指示を与えることができるのは、
ただ「守護霊」（目に見えない内的存在）だけである

そして重要なのは知識よりも
「「知識」をぐらつかせ、解きほぐす」ための「知恵」である

上記のことは
学校や教える-教えられるといういわば師弟関係
知識偏重などが盲目的に信仰されていないかぎり
それらの「そもそも」は意味を失うと思われるのだが
問題なのはそれらが問われることさえないということだろう

続いて貧富の格差や権力について

「狩猟採集民プナンの社会には、貧富の格差」がない
プナンでは「誰かがものを独り占めすることを認めない」
「プナンの人たちは、分かち合う精神を基本にしながら
人間関係」が築き上げられている

そこには「その場その時に生まれる
アドホックな（一時的な）リーダー」以外は存在しない

そしてプナン語には
ほとんど使われることのない
「分かち合う寛大な精神を称える
「よい心がけ（ジアン・クネップ）」という言い回し」はあるが
「ありがとう」という言葉自体が存在していない

あらためて「そもそも」を問えば
「ありがとう」は「有り難い」であって
めったにないからこそその謝意
「有り難く」なく常にシェアされている状態では
その言葉そのものが不要ということだろう

さらに心の病や死について

プナンの社会には「心の病を抱えている人が存在しない」

また「人が死ぬと残された近親者たちが名前を変える
「デス・ネーム」という習慣」がある
この習慣をプナン自身は「名前を変える」と呼んでいる

プナンが自発的に名前を変えるのではなく
「生や死に関わる出来事が、
外側から名前を変えるように強いてくる」のである

プナンにとっては
「身体と魂をしっかりとつなぎ止めておく役割を果たすために、
何かが起こるたびに新たな名前が必要であるかのように、
人の生活史の中でこころと変わる」という

日本では死者に対して戒名や法名が与えられ
「「新しい生命」を持った存在者として「あの世」にいる」
とされるが
プナンでは「死者の名前を呼ぶことを忌避して死者を無名化し、
それと同時に、死者と関わりのある人々の名前を
デス・ネームに変え」
「死者の輪郭を虚ろなあやふやなもの」とし
「生きている人々の意識は、新しく個人名を与えて
刷新された共同体に振り向けられる」

そして自然と人間との関係

プナンにおいては
「生き物ごとにそれぞれの世界があって、動物と人間は連続し」
「「自然」は人間から隔てられて」はいない

カナダの人類学者エドゥアルド・コーンは
「森それ自体」も思考していたとした
またマオリでは「「川に人格がある」とさえ主張される

以上のように
私たちの「常識」の多くは
無前提にすり込まれているだけで
「そもそも」を問うことで
見えてくるものもずいぶん異なってくる

本書の副題は
「生きづらさの「そもそも」を問う」
となっているが
なぜ生きづらいのか
その「そもそも」が
私たちの「常識」に由来するのだとしたら

世の中のほうはすぐには変わらないとしても
それを問い「ひっくり返す」ことで
個人の意識が囚われから自由になるだけで
「生きづらさ」から解放たれやすくなるのではないか



web岩波に『図書』2024年8月号の転載で
塩瀬隆之「反対語から考えを深める」が掲載されている

ちひろ美術館・東京および安曇野ちひろ美術館で
2024年3月1日からいわさきちひろ没後50年の記念特別展
「いわさきちひろ ぼつこ 50ねん こどものみなさまへ」
が開催されたが

塩瀬氏は企画協力者の一人であることから
その著書『問いのデザイン』の視点から
「平和についての問いを考えてほしい」というリクエストがあった

塩瀬氏は
「個人的な習慣としている問い方の一つ」でもあり
また「反対語のワークショップ」」を行ってもいることから

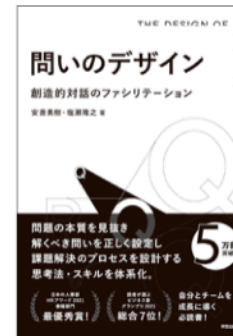
「「平和の反対語は？」と尋ねられたら、
何という言葉を思いうかべますか？」
という問いを考えるが
「そこで得た最初の気づきが、
「わたしたちは平和のことをよく知らないかもしれない」だった」

「平和の反対語は？」と尋ねられたら
ふつうはおそらく「戦争」という言葉が浮かぶだろうが

「改めて、「平和」の反対語を
「戦争」や「争い」といった言葉を使わずに考えるとしたら、
わたしたちはどんな言葉を頼りにすればよいのか。
それがわたしの頭から離れない大きな問いの一つとなり、
この企画をきっかけに、たくさんの人に
同じ問いを投げかけたく」なったのだという

「よく知らない「戦争」という言葉だけで、
果たして平和にちゃんと向き合うことができていたのか。
「戦争はよくない」「戦争はなくすべきだ」。
どんなに美辞麗句を並べても、
やはりわたしたちは戦争を直接は知らないし、
止める方法も起こさないやり方も、理解しているとは言い難い。
まずはもっと身近な言葉から、自分たちの知っている言葉を尽くして
「平和」の反対語を考えるべきではない」かと

塩瀬氏はこれまでに行ってきた
「はたらく」や「まなぶ」などの反対語のワークショップを通じ
「何気なく使っているわたしたちの言葉、
それが表す概念の輪郭をもう一度はっきりさせるきっかけ」を
生むことを意図してきたが



- 塩瀬隆之「反対語から考えを深める」
[web岩波 2024.08.02／『図書』2024年8月号より]
- 安斎勇樹・塩瀬隆之『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』
(学芸出版社 2020/6)

「平和」の反対語について
「違いを認めようとししないこと」や
「知らないことを遠ざけてただ恐れること」といった言葉や
「知らないままにせず、もう一歩近づく勇気をもつ」
「情報を鵜呑みにせず、自ら声をかけて確かめてみる」
といった言葉やアイデアを見つけることの
「延長線上に平和のタネがあるのであれば、
わたしたちにもまだできることがたくさん」あるのではないかという

反対語とされている言葉というのは
往々にして極端な理解や判断に結びつき
それらの言葉が私たちのなかで
どのように働いているのかに対して無自覚なまま
死んだ言葉さらにいえば危険な言葉となっていることも多くある

白に対して黒（善に対して悪というものそうだが）
というのはあまりに二階調的短絡に陥りがちだし
階調を増やし灰色を加えたところで
白と黒にとらわれていることに違いはない

まずは白の反対語や黒の反対語を
それぞれ黒や白ではないところに見出す必要がある

そしてそれらの言葉がじぶんのなかで
どのように働いているのかを確かめながら
言葉を生きたものとしていくこと

現代では教育やさまざまなメディアなどを通じて
死んだ言葉でしかない情報や知識が日々垂れ流されているが
そうした言葉に安易な理解で巻き込まれてしまわないためにも
「反対語」とされているものにとらわれず
そこにむしろ新たな視点を導き入れることで
見えてくるものもあるのではないだろうか

ルドルフ・シュタイナーの四つの「神秘劇」は
一九一〇年から一九一三年にかけて書かれている
副題は「薔薇十字神秘劇」

アントロポゾフィーは一四世紀の靈的指導者
クリスチャン・ローゼンクロイツによる
「薔薇十字運動」の流れの中にあるといわれるが

「神秘劇」では
紀元前一四世紀の第三文化期のエジプトの秘儀にはじまり
ゴルゴタの秘儀を経て
現代人にとって最重要課題である
「意識魂」の発展に深く関わる人類の精神的発展が

画家のヨハネス・トマジウス
他の人物より靈的認識の進んでいるマリア
歴史哲学教授のカペジウス
自然科学者ストラダといった人物が

何千年というカルマのプロセスを経て
魂の発展を遂げながら秘儀参入の道を歩む
「生きた現実の体験」として描かれている

シュタイナーの「最も本来的な使命」は
「輪廻転生とカルマの法則の認識することを
中央ヨーロッパの文明にもたらし、
そこから20世紀以降の世界にもたらす」ことだったというが

「神秘劇」は「人の生について霊学が言わなければならないことを
感覚化すべき」課題にこたえたものだといえる

「輪廻転生とカルマ」を
劇として見えるものにするとということである

私たちにとって「意識魂」の発展が重要なのは
「意識魂のおかげで人は自立する、
つまり自分を世界から切り離すこと」で
運命が「「個人的」に体験されるもの」になるからであり

それによって「自立の力を自分自身に向け、
あたかも他人と対峙するように自分自身と対峙」することで
世界は「内面的な経験として自らを語るように」なり
「世界への関係」を深めることができる

また神秘劇は「アントロポゾフィー運動と「キリスト衝動」の
歴史的な作用から派生」したもので
「近代の始めに形成された薔薇十字運動であるテンブル騎士団の結社と、
アントロポゾフィー協会と近い関係にある
ベネディクトゥスを囲む共同体をテーマ」にしている

主に「中央ヨーロッパ」を背景にした
「輪廻転生とカルマの法則」の
秘儀的展開として描かれていて
「自我」のありようの異なっている日本において
日本語の言霊とはかけ離れた「神秘劇」が
「生きた現実の体験」として
受け取られるのは難しいだろうが

「意識魂」の発展という現代的テーマとして
みずからのそして世界との関係における「カルマ」を
位置づけることは西欧に比べむしろ容易なのではないかと思われる

さて私事になるが
人智学出版社刊の『神秘劇I』には
「I. 認識の関門」と「II. 魂の試練」が収められているが
『神秘劇II』（「III. 境域の守護霊」「IV. 魂の目覚め」）は
未完のままになっていた

そんななか十年ほど前になるが故香川裕子氏から
「III. 境域の守護霊」「IV. 魂の目覚め」の邦訳資料や
その他の「神秘劇」についての資料を送っていただき
その全体を少しずつ知ることができるようになった

とはいえそこから「神秘劇」がどういうものかを
少しばかりイメージできるようになったのは
ようやく最近になってからのこと
最初に『神秘劇I』を手にしてから三〇年以上にもなる

遅々として理解は進まないままだが
ふとおもいついて「神秘劇」について
少しばかり触れておきたいと思いとりあげてみることにした



- ルドルフ・シュタイナー『神秘劇I』（人智学出版社 1982/8）
＊「神秘劇I. 認識の関門」「神秘劇II. 魂の試練」
- ルドルフ・シュタイナー『神秘劇III. 境域の守護霊』『神秘劇IV. 魂の目覚め』（香川裕子氏による翻訳・作成資料 2010/1,2010/4）
- 上松佑二『光の思想家』（国書刊行会 2022/10）～「第8章神秘劇」
- ミヒャエル・デーブス（香川裕子訳）
『人生の危機と劇的緊張 ルドルフ・シュタイナーの神秘劇への導入』（ヤーデ・イニシアティヴ 2015/4）
- ペーター・ゼルク（香川裕子訳）
『ルドルフ・シュタイナーの神秘劇の中の秘教的共同体』（ヤーデ・イニシアティヴ 2016/9）

近藤和敬の『人類史の哲学』は
人類史を哲学から問い直し
哲学を人類史から問い直すために
「自然、人間、そして社会の形成の基礎を問い、
近代の自律／他律を超える〈異律〉という原理から
人類史を再構成し、学問＝知そのものを問い直す」という大著だが

そのなかから「序論」において論じられている
本書のテーマを展開する前提となっている
思考の自由を得るために不可欠な
「価値の批判としての哲学」をとりあげる

哲学のなしうることは
「人間の思考の自由を拡張すること、
人間の思考をそれまでよりも自由にすること」である
というところから論じ始められるが

「われわれの思考は常に不自由だ」という

いうまでもなく「思考の自由」とは「連想の自由」
つまり「なんでも好きに考えてとい、
という放任の自由」のことではない

思考の自由とは「力であり、肯定であり、変化」であり
また「戦い」であると同時に「逃走」であるが
「征服戦争ではない」という（そこに自由はないから）

そのためには「自らの思考の不自由を認識」し
「次いでそれを他者と共有すること」が求められる

現代における「思考の不自由」はどこにあるかといえは

まず「全体化＝反孤立化」が挙げられる
「「みんなで一緒に」の精神」であり
孤立化することへの恐れである

次いで「相互承認＝反非承認」
「お互いに認めあおう」の精神
つまり承認欲求あるいは承認されないことへの憎悪と恐怖

そして「表面的善意
あるいはパターンリスティックな易しさ＝反難しさ」
「みんなにひらかれたやさしさ」の精神
つまり「相手のために装いながら、
自分を含めて別のものの利得を同時にその原因として、
しかし往々にして無自覚な仕方ですりこませるような意志」である

これらの「精神」は
「学校のエデュケーションをはじめとし」
大学・企業での活動や様々な社会活動においても
「よいこと」の典型として推奨されている

しかもこれらの諸価値が働けば
そこから「零れ落ちていくもの」は
「自己責任」として切り捨てられることになる

これらの「精神」を無前提に「価値」として受け取り
「それらの価値によるのではない仕方でする」ことが
できなくなっているというのだが

思考の自由とは
そうした「自らの思考の不自由を認識」することからはじまる

そして思考の自由を拡大するためには
「既存の価値の認識と、その価値の相対化と、
それとは異なる価値の創出およびその価値に従って
一貫した思考の実践」が必要となる

「われわれの思考を動かしている原因とそのメカニズムを
客体として把握することによって、
その原因の束縛から自由にはなれないまでも、
その拘束性を弱めること」ができる

自由な思考とは
その名のとおりに
自由に考えることのできる思考である

自由にというのは
じぶんがとらわれている
あるいは無前提に価値としているものをはなれ
別の価値へもひらかれているものでなければならない

「そういうものだ」ではなく
「そうでなくてもいい」ことを
どれだけ豊かに深く考えることができるかである

考えることができないと思い込んでいることを考える
想像できないと思い込んでいることを想像する
つまり今のじぶんの思考を見つめなおし
それが檻のなかにあることに気づき解放することで
どれだけ育ててゆけるかが鍵となる



■近藤和敬『人類史の哲学』（月曜社 2024/1）

『ユリイカ』 2024年9月号で
「石」の特集が組まれている

そのなかから
mediopos3504（2024.6.21）でとりあげた
『夢みる石 石と人のふしぎな物語』の著者のエッセイ
徳井いつこ「驚くべきもの、ただそこにあるだけ。」から

『夢みる石』は二七年前に出版された
『ミステリーストーン』の新装復刊だが
こうして『ユリイカ』が石の特集をするように
「四半世紀が経過し、
石をめぐる光景はすっかり変化した」という

ばくも子どもの頃から石好きで
小学校の低学年の頃
科学雑誌の付録についていた鉱物標本を目にして以来
河原でいろんな石を拾い集めたり
鉱山跡などの山に分け入って石ころを探したり
工事現場に転がっている晶洞鉱物を探したりしていた

大人になってからも石への興味は続いているが
（いわゆる宝石にはあまり興味がないけれど）
たしかに四半世紀前頃でもまだ
「石をめぐる光景」は一般的には冷やかなものだった

しかしこうして『ユリイカ』が特集を組むまでになったのだ
（とはいえ反面ポピュラーになってくるとどこか興ざめだが）

さてエッセイは詩人のシンボルスカの
「石との対話」の話からはじまる

シンボルスカについては
mediopos2825（2022.8.12）でもとりあげたことがあるが

この詩では
石の扉を叩いて「入れてください」と言っても
石は頑なに拒むばかりだという
石は「ただ目の前にある、それだけなのだ。」

しかしこのエッセイを読み終えたとき
頑々な石のイメージは少しばかり変わってくる

最後にとりあげられている
アニー・ディラード『石に話すことを教える』では
石は「ポーカーフェイス」で
「人間に関心のないそぶりをして、
そのじつ呼びかけている」としている

頑固一徹でとりつく島のないような寡黙な爺さんが
ほんとうは別の顔を隠し持っているように・・・

このふたつの話のあいだに
石についての本などが紹介され
著者自身のインディアンに関連した著書からの
興味深い話も挿入されている

カイヨワ『石が書く』では
石との出会いは「通告」であるという

その出会いによって
ひとは「宇宙という織物にふれ」
「世界という巨大な迷路の存在」をありありと感ずるのである

バード・ベイラーの絵本『すべてのひとに石がひつよう』では
「友だちの石、特別な石、いつまでも大切にできる石を、
どうやって見つけるか？」には「一〇のルール」があるが
最後のルールは「誰にも相談などしない」ことだという
じぶんだけの秘密にしておくということだろう
魂の奥にしまっておく大切な宝物として・・・

ムナーリ『遠くから見たら島だった』では
「石ころだらけの場所ですごくヴァカンスほど、
楽しいものはない」という

エッセイの最後が上記の
アニー・ディラード『石に話すことを教える』で
「子どものころ、ひとり暮らしの老人が死ぬまでに残したとい
う
石のコレクションをそっくりゆずり受けた」話である

本の紹介ではないが
ジョージア・オキーフとマックス・エルンストが
砂漠に惹かれ石に魅せられる話も紹介されている

そうした話題のあいだに
著者がカリフォルニアに暮らしていたころの旅の話が語られる

著者は毎月のように旅をしていたが「行き先は、
アリゾナ、ニューメキシコ、ユタ、コロラドの四州と、
それらが接する「フォー・コーナーズ」と呼ばれるエリア」で
ひとは「middle of nowhere（何もない場所）」と呼ぶ
「砂漠、遺跡、居留地」だが
そこは「石の王国だった」のである



- 徳井いつこ「驚くべきもの、ただそこにあるだけ。」
（ユリイカ 2024年9月号 特集＝石 ―寡黙の極にある美―）
- 『シンボルスカ詩集』
（つかだみちこ編・訳 世界現代詩文庫29 土曜美術社出版販売（1999/12）文庫―
- ロジェ・カイヨワ（菅谷暁訳）『石が書く』（創元社 2022/8）
- バード・ベイラー（イラスト：ピーター・パーナル／北山耕平訳
『すべてのひとに石がひつよう』（河出書房新社 2022/8）
- ブルーノ・ムナーリ（関口英子訳）『遠くから見たら島だった』
（創元社 2023/12）
- アニー・ディラード（内田美恵訳）『石に話すことを教える』
（めるくまーる 1993/11）
- 徳井いつこ『夢みる石 石と人のふしぎな物語』（創元社 2024/6）
- 徳井いつこ『スピリットの器―プエブロ・インディアンの大地から』
（地湧社 1992/10）
- 徳井いつこ『インディアン 夢のあと 北米大陸に神話と遺跡を訪ねて』
（平凡社新書 2000/2）

また著者はインディアンの人々を訪ね
「プエブロの土器づくりを取材」している

ホピの土器づくりの女性は「土器を成形しているとき、
たまに粘土が話しかけてくる」というが
「あるいは石の声も聴いていたかもしれない」と
想像を広げている

石は「ただそこにあるだけ。」だが
だからこそ石にはひとのさまざまな思いが込められ
「驚くべきもの」ともなるのだろう

ちなみに家の中が石だらけになることから
ある時期から石拾いの習慣を止めているが
（学生の頃は石だらけになった押し入れの底が抜ける・・・と
知らない間に捨てられてしまった経験があったりもする）
それでも「石」に出会うとその魅力（魔力）に惹かれてしまう

『群像』で連載中の奈倉有里「文化の脱走兵」
22回目は「駄洒落」の話

奈倉有里は「ちいさなころから駄洒落が好き」だったといい

「ロシア語を学びはじめてから詩が大好きになった理由のひとつは、そこに言葉の響きあいという、駄洒落にも通じる楽しみがあったから」だというが

「自分で考えられるかといえばさっぱりだめ」だと謙遜しながらもエッセイの最後に「ゲートはやっぱり、すげーって」という駄洒落を披露していたりする

それはともかくエッセイでは「いつからか駄洒落が「おやじギャグ」と呼ばれ、古びたものとして切り捨てられていった」ことを憂え

「駄洒落を切り捨てるなんて、言語のゆるやかな自殺といっても過言ではないくらいもったいない行為だ」といい

「駄洒落は多くの言語で愛されてきた知的で遊び心に溢れた営み」であり「言語もまた、その構造そのものに遊び心の部分を保っておかないと、どこかに無理がくる。軟骨のない関節みたいなものだ。」としている

シェイクスピアの作品は言葉遊びや駄洒落だらけでありユゴーの『レ・ミゼラブル』には「駄洒落のオンパレードが繰り広げられる有名なシーン」がありブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』のなかでコロヴィエフは、「光と闇について「下手な駄洒落」を言った罰として、延々と駄洒落を考案し続けなければならなくなったことになっている」

また日本の哲学者・九鬼周造の随筆『偶然の産んだ駄洒落』でも「駄洒落を聞いてしらぬ顔をしたり眉をひそめたりする人間の内面生活は案外空虚なものである」として天野貞祐・和辻哲郎・西田幾多郎とのあいだの「アマノがアマゴとアナゴを間違えた話」を披露している

mediopos-2143（2020.9.28）で「言語の音響上の偶然的関係に基づく遊戯」として九鬼周造が晩年に押韻定型詩を提唱した「押韻論」

そしてそれを受けた詩の第四の革命として中村真一郎・福永武彦を中心に『マチネ・ポエティック詩集』が刊行されたもののその革命が頓挫した話をとりあげたことがあるが

エッセイでも関連したことにふれられていて「もともと脚韻詩の習慣がなかった日本語では、西洋詩の翻訳や現代詩に脚韻を取り入れようという試みがおこなわれるたびに、この駄洒落の連想が障壁になってきた」といい

「脚韻詩に挑戦しても、押韻（特に脚韻）が駄洒落を連想させるために、切ない叙情詩の場合でもテーマ性にそぐわない「面白み」が追加されてしまい、読者を泣かせたいのか笑わせたいのかわからなくなってしまうというジレンマが生じる」ことがとりあげられている

さてせっかくなので「しゃれ」という言葉の由来について鈴木棠三『ことば遊び』から紹介しておきたい

「しゃれという語は、洒落の転化した語であるとするのが江戸期の学者の説だが、幾分か江戸っ子の理想を先入主とした当為の説」という

「しゃれ」は動詞シャレルの名詞形だが「平安語ではサル（曝・晒）とザル（戯）とがあり、ザルを清音でさると発音したこともあった」ようだ

平安のザル（ザレル）には
「①ふざける意
②気がきいて機転がきく、物わかりがよい
③あだめいて、くだけた感じがする
④風雅な趣がある」といった意味があり「中世になると、シャレルと拗音化する」という

つまり「シャレルとジャレルと発音の区別を意識することにより、意義が分かれ」るようになり「濁音のジャレルには①のふざける、戯れる意味が一方向的に濃くなり、清音のシャレルは②③④の意味を独占するようになった。この名詞化がシャレであったと考え」られる「従って、シャレは審美的、抽象的な内容」を表すようになる

この「神秘学遊戯団」にも「戯」という言葉が入っているがまさに「遊」んで「戯れ（ザレ）」ることそのものをテーマとしているといってもいいときには「シャレ」てみようとしたりもしながら



- 奈倉有里「文化の脱走兵 22.君が笑ってくれるなら」（『群像』2024年9月号）
- 九鬼周造「偶然の産んだ駄洒落」（『九鬼周造随筆集』岩波文庫 1991/9）
- 『マチネ・ポエティック詩集』（水声社 2014.5）
- 『九鬼周造全集第五巻』（岩波書店 1981.4）
- 藤田正勝『九鬼周造／理知と情熱のはざまに立つくことば>の哲学』（講談社選書メチエ 2016.7）
- 鈴木棠三『ことば遊び』（講談社学術文庫 2009/12）